

^{なが}長 ^{おき}沖 ^こ古 ^{ふん}墳 ^{ぐん}群 XIII

— 第194・195・196・197・201号墳の調査 —

児玉南土地区画整理事業発掘調査報告書5

2014

本庄市教育委員会

序

本庄市はかつて中山道随一の繁栄を誇った宿場町として、また国学者塙保己一誕生の地として広く知られているところです。そのような豊かな歴史的背景と文化的風土をもつ本庄市は、数多くの埋蔵文化財にも恵まれ、旧石器時代から近代に至るまでの多様な遺跡が、市内の各所に分布しています。なかでも、市内に分布する古墳の数の多さは特筆され、大久保山古墳群、旭・小島古墳群、秋山古墳群などは、地域を代表する古墳群として、埼玉県選定の重要遺跡となっています。長沖古墳群も、県選定重要遺跡のひとつで、前方後円墳を含む200基以上の古墳からなり、築造数においては、東日本最大級の古墳群として著名な存在となっています。

本書は、平成21年度から23年度にかけて、児玉南土地区画整理調査事業に伴って発掘調査を実施した、5基の古墳の調査成果を報告したのですが、この中では、とくに前方後円墳である第196号墳で、古墳の麓にあたる部分から、「円筒埴輪棺」が非常に良好な状態で出土したことが注目されます。「円筒埴輪棺」は、古墳の周りに立てられる円筒埴輪を利用して造られた簡単な埋葬施設ですが、立派な石室などに葬られる有力者ばかりではなく、古墳の周囲に埋葬されるような人物もいたことは、古墳が造られた目的がどのようなものであったのかをあらためて考えてみる材料になるのではないのでしょうか。第196号墳の「円筒埴輪棺」は、古墳や古墳時代の人びとの葬送観念を探究していくうえで、重要な資料となることでしょう。

本書に報告されたような貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちの使命であり、うずもれた歴史を解明し、これに学ぶことは、より良い未来を築くための糧となります。今後は、本書が学術研究の発展に資するとともに、一般にも広く活用され、郷土史への関心や埋蔵文化財への理解が一層深められることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた関係諸機関、直接調査の労にあたられた皆様に心よりの御礼を申し上げます。

平成26年 3月

本庄市教育委員会
教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町長沖字御沢および同児玉字賀家ノ上に所在する長沖古墳群第194～197号墳ならびに第201号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、児玉南土地地区画整理事業に伴い、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査地点ごとの調査期間、調査面積、調査原因および調査担当者は以下のとおりである。

- ・ 第194号墳

調査期間 自 平成21年9月1日 至 平成21年9月15日
調査面積 34㎡
調査原因 市道新設工事
調査担当者 大熊季広

- ・ 第195号墳A地点

調査期間 自 平成21年9月1日 至 平成21年9月15日
調査面積 27㎡
調査原因 市道新設工事
調査担当者 大熊季広

- ・ 第195号墳B地点

調査期間 自 平成23年6月30日 至 平成23年8月11日
調査面積 8㎡
調査原因 市道新設工事
調査担当者 大熊季広

- ・ 第196号墳

調査期間 自 平成23年1月29日 至 平成23年2月4日
調査面積 372㎡
調査原因 範囲確認
調査担当者 大熊季広

- ・ 第197号墳

調査期間 自 平成23年1月29日 至 平成23年2月4日
調査面積 375㎡
調査原因 範囲確認
調査担当者 大熊季広

- ・ 第201号墳

調査期間 自 平成23年6月30日 至 平成23年8月11日
調査面積 77㎡
調査原因 市道新設工事
調査担当者 大熊季広

4. 整理調査期間は以下のとおりである。

自 平成25年4月1日 至 平成26年1月14日

5. 整理調査および本書の執筆・編集は本庄市教育委員会文化財保護課太田博之が担当した。

6. 本書に掲載した遺構実測図、遺構写真撮影、土層注記は各発掘調査担当者が行なった。

7. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。

8. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。

ご芳名を記して感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

昆 彭生 坂本和俊 金子彰男 丸山陽一 池田匡彦 中沢良一 丸山 修

9. 本報告の発掘調査、整理調査および報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

・発掘調査(平成21～23年度)		・整理調査および報告書編集・刊行(平成25年度)	
教育長	茂木 孝彦(平成21～23年度)	教育長	茂木 孝彦
事務局長	腰塚 修(平成21・22年度)	事務局長	関和 成昭
	関和 成昭(平成23年度)	文化財保護課長	川上 美恵
文化財保護課長	儘田 英夫(平成21年度)	副参事兼課長補佐	鈴木 徳雄
	金井 孝夫(平成22・23年度)	課長補佐兼	
副参事兼課長補佐	鈴木 徳雄(平成22・23年度)	埋蔵文化財係長	太田 博之
課長補佐	鈴木 徳雄(平成21年度)	主 幹	恋河内昭彦
課長補佐兼		埋蔵文化財係	
埋蔵文化財係長	太田 博之(平成23年度)	主 査	大熊 季広
主 幹	恋河内昭彦(平成23年度)	主 査	松澤 浩一
埋蔵文化財係長	太田 博之(平成21・22年度)	主 任	松本 完
埋蔵文化財係		臨時職員	的野 善行
主 査	恋河内昭彦(平成21・22年度)		
主 査	大熊 季広(平成21～23年度)		
主 査	松澤 浩一(平成23年度)		
主 任	松澤 浩一(平成21・22年度)		
主 任	松本 完(平成21～23年度)		
臨時職員	的野 善行(同)		

凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は、世界測地系に基づく。各遺構における方位針は、座標北を示す。
2. 本書掲載の図面のうち、遺構図の縮尺は、各図に明示している。
遺物実測図の縮尺は、1／4に統一している。
3. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
4. 遺構断面図のスクリーントーンのうちストライプは地山のローム層を示す。
5. 本書掲載の地形図は、国土交通省国土地理院発行1／50,000「本庄」、長沖古墳群発掘調査・確認地点図は、本庄市都市計画図1／2,500に加筆したものをを用いた。
6. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	3
第Ⅲ章 長沖古墳群の概要	6
第Ⅳ章 調査の成果	
1 第194号墳	9
2 第195号墳	13
3 第196号墳	18
4 第197号墳	20
5 第201号墳	28
第Ⅴ章 結語	33
参考文献	
写真	

第 I 章 発掘調査に至る経緯

埼玉県的重要遺跡に選定されている長沖古墳群は、南側の上部山地内から流れ出る小山川(旧身馴川)の北側に沿って半島状に延びる児玉丘陵上から東端の丘陵下の氾濫原にかかる、広大な畑地帯に立地している。その範囲は、東西約1700m、南北約500mの帯状に、多数の古墳が分布している。古墳は、5世紀から7世紀にかけて築造されており、その数は現在のところ前方後円墳7基を含む202基の存在が確認されているが、おそらくその倍の400基以上は存在するものと推測されている。

この長沖古墳群が立地する畑地帯は、養蚕が盛んであった時代はそのほとんどが桑畑として利用されていたが、古墳群の東側が旧児玉町の市街地に接していることもあって、戦後の高度経済成長期以降には、古墳群内にも徐々に宅地化が進行していた。そのため、昭和48年に長沖地区が第一種住宅専用地域に指定され、昭和49年度には現在の児玉総合支所(旧児玉町役場)前から小平に通じる野上・児玉線(県道187号線)より東側の約37haを対象とした「児玉南土地区画整理事業」が計画された。

この計画に伴って、埼玉県教育委員会が事業地区内に所在する文化財の現地確認調査を行ったところ、前方後円墳2基を含む15基の古墳と集落址2ヶ所(古墳群東端の長沖1号墳付近と本報告の「縄文A地区」)の存在が確認された。これをもとに、町と県教育委員会で事業地区内の文化財の取り扱いについて協議が行われ、「保存状態の良い前方後円墳2基の付近は児童公園として残し、他の古墳は調査を実施して記録を残すこととなった」(菅谷他1980)。

発掘調査は、昭和50年度より当初4ヵ年計画で実施されたが、その後1年延長されて5ヵ年計画となった。今回報告する「縄文A地区」は、昭和51年度の第2次発掘調査で長沖14・15・16号墳の周溝とともに調査され、「江ノ浜地区」は、昭和53年度の第4次発掘調査で長沖21号墳の周溝確認作業に伴って調査されている。

(文化財保護課埋蔵文化財係)



(児玉南土地区画整理事業地区：2003年頃)

第Ⅱ章 遺跡の環境

1 地理的環境

本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地、さらにその南方に連なる山地とに大別される。低地には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。台地は身馴川(小山川)扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川(小山川)扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、小山川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県藤岡市浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市鶴森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。また、山地は上武山地の北縁にあたり、奥秩父山地に比べ浸食が進み、谷が広く、起伏の少ない地形を特徴としている。本書に報告する長沖古墳群は、本庄市児玉町高柳から同長沖にかけての丘陵端部とそこから連続する台地上に立地している。

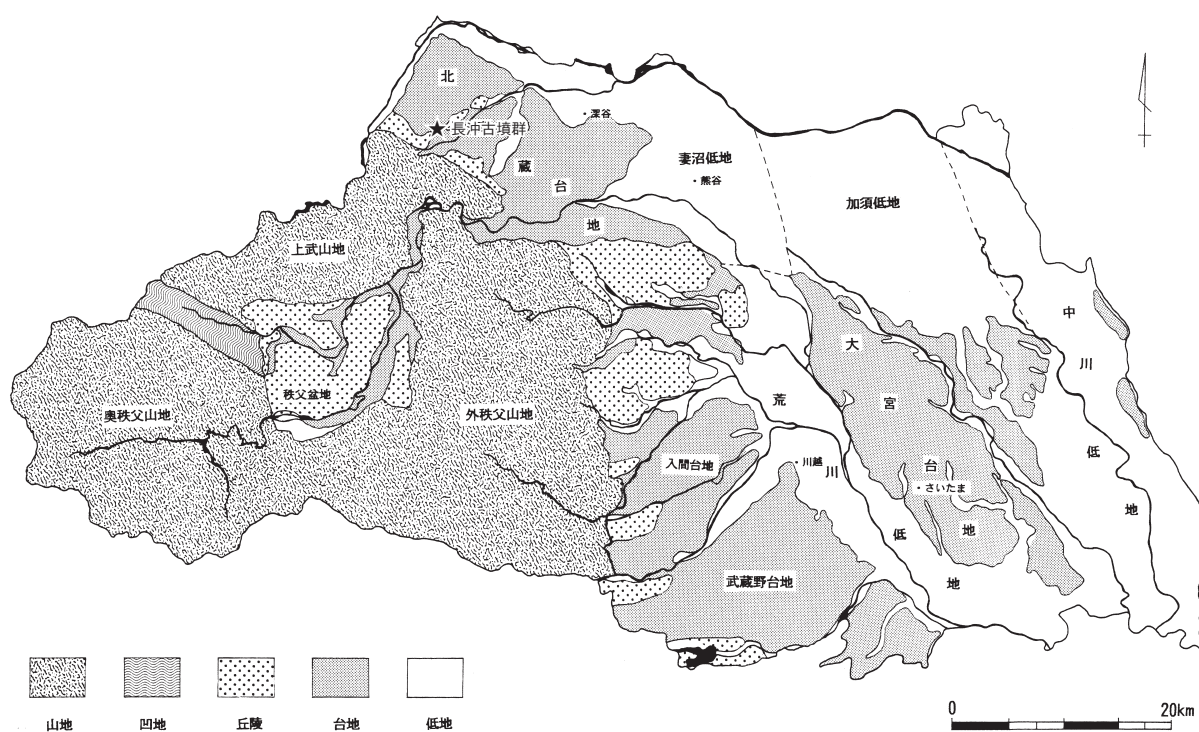


図1 埼玉県の地形

2 歴史的環境

本庄市を含む児玉地域の古墳時代は、美里町南志戸川遺跡などにおける畿内系、東海系土器の流入、本庄市ミカド遺跡で推定された初期須恵器窯の存在などに見られるように、当該期の流通・生産の中心地としての地位を占めていたと考えられる。さらに、和泉期の竈導入に見るような先進性や、格子タタキ調整技法による土器・埴輪から想定される渡来工人の移入も含め、その地域的特殊性についてはすでに多くの議論がなされている。以下では、児玉地域の古墳の変遷を概観し、歴史的環境の説明としたい。

本庄市鷲山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である(坂本1986)。女堀川中流域の丘陵上に位置し、手焙形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形に広がる前方部の平面形や手焙形土器の出土から、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は、口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部のみに穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より儀器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階の資料とする理解も可能であり、築造は前方後円墳集成畿内編年3期(以下単に集成〇期と略す)に下るものと考えられる。

大久保山丘陵上に立地する本庄市北堀前山1号墳は円墳と考えられてきたが、本庄市教育委員会による確認調査の結果、全長70mを超える埼玉県内では最大規模の前方後円墳であることが明らかとなった。口縁部上段に葺石を備え、周堀をめぐらせている。埴輪はもたず、出土した土師器の型式から集成4期の築造が考えられる。美里町長坂聖天塚古墳(径50m)は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土槨と木棺直葬の計6基の埋葬施設から稜雲文方格規矩鏡、獸首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む刀子形石製の形態などから、古墳時代前期後半を降らないと考えられる。また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長胴化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長坂聖天塚古墳に次ぐ時期の築造とされる。北堀前山1号墳に近接して所在する北堀前山2号墳は、従来、径28mの円墳とされてきたが、本庄市教育委員会による第2・3次調査の結果、一辺30m前後の方墳となることが確認された。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか、周堀から土師器埴が検出されている。

集成6期を前後する時期には、生野山丘陵の本庄市生野山將軍塚古墳(径60m)、同金鑽神社古墳(径68m)、女堀川流域の本庄市公卿塚古墳(径60m)などの大型の円墳が相次いで築造される。児玉地方で古墳がもっとも大型化するはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葺石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では埴輪に格子タタキ技法の存在することが知られている。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などとの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来工人の関与があった可能性は高い。

これら3古墳に比べてやや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳(径40m)、小山川上流域の本庄市長沖157号墳(径32m)では、式の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている。

集成7・8期になると、前段階のような直径60mクラスの大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳(径34m)、生野山丘陵の生野山9号墳(径42m)など30～40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳(径12m)、同77号墳(径14m)、本庄市塚合古墳群の本庄東小学校1号墳(径19m)、同2号墳(径12m)、同三壜山2号墳(径22m)などいずれも10～20m前半台の小型円墳で、円筒埴輪の外周二次調整にB種ヨコハケを用いる二条突帯の円筒埴輪を樹立し、TK208型式の須恵器などを伴う。美里町広木大町古墳群、本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、深谷市白山古墳群などはやや遅れて、外周二次調整を欠く二条突帯の円筒埴輪とTK23・47型式の須恵器などを出土する群集墳である。神川町青柳古墳群では、集成9期前半に、横穴式石室を導入することが知られている。

集成10期に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展とともにこの時期新たに出てくる群集墳である。広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

集成9期以降には、首長墓として前方後円墳が再び採用されるようになる。小山川上流域では本庄市長沖古墳群の長沖25号墳(40m)、同31号墳(51m)、同秋山古墳群の秋山諏訪山古墳(60m)、同生野山古墳群の生野山銚子塚古墳(58m)、生野山16号墳(58m)、小山川中流の深谷市四十塚古墳群の寅稻荷古墳(52m)、本庄市塚合古墳群中の大林二子山古墳(規模未詳)、同旭・小島古墳群の下野堂二子塚古墳(規模未詳)、神流川流域の神川町青柳古墳群の白岩銚子塚古墳(46m)などが知られる。

終末期には、前方後円墳に代わる首長墓として、深谷市前原愛宕山古墳(辺37m)のような大型の方墳や旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳(径38m)のような大型の円墳が採用されている。また各地の群集墳も後期後半段階からの連続的な造営が確認できる。

埴輪生産遺跡は、児玉地域で4箇所を確認している。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。この地域では、鴻巣市生出塚窯や深谷市割山窯のような大規模な操業は見られず、狭い地域に小規模な生産遺跡が散在する点に特色がある。美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵端部に位置し、埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、焼土層の落ち込みとして12基を確認している。本庄市八幡山埴輪窯跡は、かつて県立児玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯跡群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した。その後、1961に高等学校の校地拡張工事に伴い、2基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している。本庄市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際し、焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪を出土したことなどから埴輪窯跡の存在が想定されている。本庄市宥勝寺裏埴輪窯跡は近年の確認調査で、5基以上の窯跡が比較的良好な状態で遺存していることが確認された。遺物は鞍形埴輪4点、鬚形埴輪1点をはじめ、家、大刀、鞆、馬、人物など多量の形象埴輪を出土している。操業時期は6世紀後半段階と推定される。



図2 遺跡の位置

第三章 長沖古墳群の概要

長沖古墳群は古墳時代中期から終末期にかけて形成された埼玉県内最大規模の群集墳である。旧児玉町の市街地南方にあって、北東方向に流下する小山川左岸の丘陵部から台地面にかけて立地し、東西1700m、南北500mの範囲に分布する。古墳群北方の丘陵上に、単独で存在している157号墳を除き、現在までに、前方後円墳5基、帆立貝形古墳1基、円墳196基、計202基の古墳が確認されている。

調査によって築造時期の判明している古墳の中では、14号墳が最も古い(恋河内2012)。直径28mの円墳で、外面二次調整B種ヨコハケ・無黒斑の円筒埴輪、家形と思われる形象埴輪片が出土し、築造時期は集成7期である。ただし、東隣の15号墳の周溝から、野焼きによると思われる突出度の高い三条突帯の円筒埴輪が出土している。15号墳は直径19mの円墳で、二条突帯の円筒埴輪をもつ集成8期の古墳であることから、付近に集成6期以前の大型古墳が存在したと考えられる(菅谷ほか1980)。また、14・15号墳の北東約150mの地点に所在した34号墳でも、古相の円筒埴輪片が検出されている(菅谷1984)。外面調整は一次タテハケのみで突出度の高い突帯をもち、外面に赤彩が見られ、野焼きによると思われる資料であることから、同墳の築造時期を集成6期以前とする見解が示されている(坂本2008)。このほかに直径31mの円墳である54号墳も、7期以前の築造とする意見がある(坂本2008)。

つづく集成8期には、15号墳、172号墳、173号墳など、直径20m以下の小型円墳の造営が見られる。いずれも墳丘を失っているが、規模の大きな古墳には埴輪が伴う。いまのところ、「古式群集墳」や「初期群集墳」と呼称しうような、密集形態の小型円墳群は確認されていないが、集成8期を中心とした時期の簡易な竪穴系埋葬施設を備えた小型円墳は、墳丘を失っている場合がほとんどと思われる。今後の調査で検出例を増す可能性が高い。

横穴式石室は集成9期から10期にかけての時期に導入されているらしい。導入の当初には先ず短冊形無袖式横穴式石室が採用され、その後、集成10期のうちに両袖式石室が現れ、集成10期後半から終末期にかけて、模様積みによる胴張型石室へと移行するようである。

群内に所在する前方後円墳、帆立貝形古墳は、いずれも集成8期から10期にかけての築造と考えられる。三条突帯の円筒埴輪、靱などの器財埴輪を有する32号墳は、墳丘を大きく削られているが、試掘調査の結果から、原状は主軸長60mを超える群内最大規模の前方後円墳であった可能性がある(恋河内・大熊2006)。帆立貝形古墳の8号墳は、埋葬施設に古相と考えられる胴張型横穴式石室を採用し、埴輪、TK209型式期の須恵器甕を出土することから、集成10期後半の築造が推定される(菅谷ほか1980)。

終末期には、盟主墳的な大型の円墳や方墳が見られず、横穴式石室を備える小型の円墳が数多く築造されている。8世紀代に下る古墳は、今のところ確認されず、7世紀後半のうちに築造を停止するようである。なお、単独墳である157号墳は、直径32mの円墳で、出土した円筒埴輪の外面二次調整にB種ヨコハケと黒斑が観察される(日高1994)。築造時期は長沖古墳群の初現に近く、集成5～6期に該当するだろう。

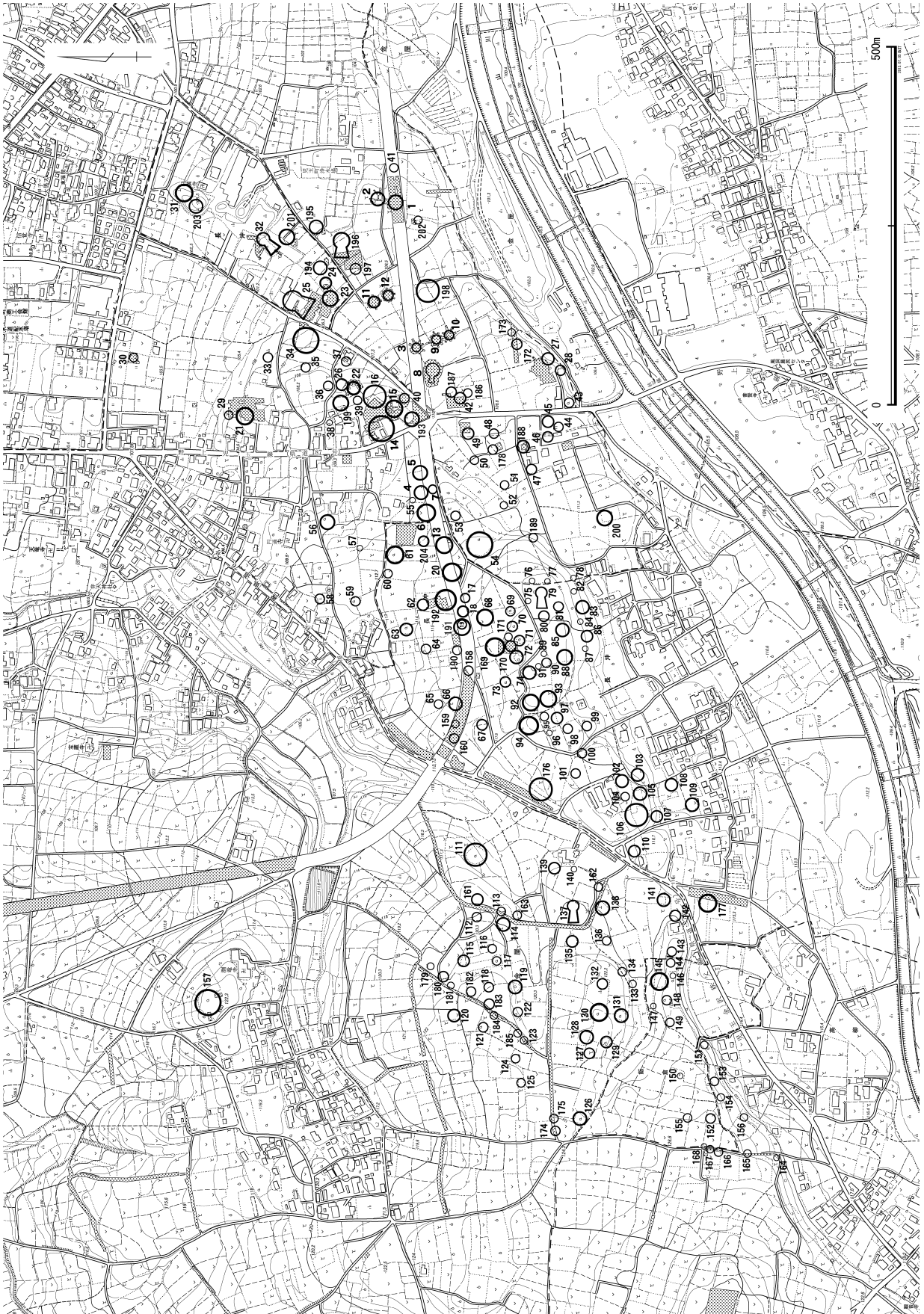


图3 長沖古墳群古墳分布図

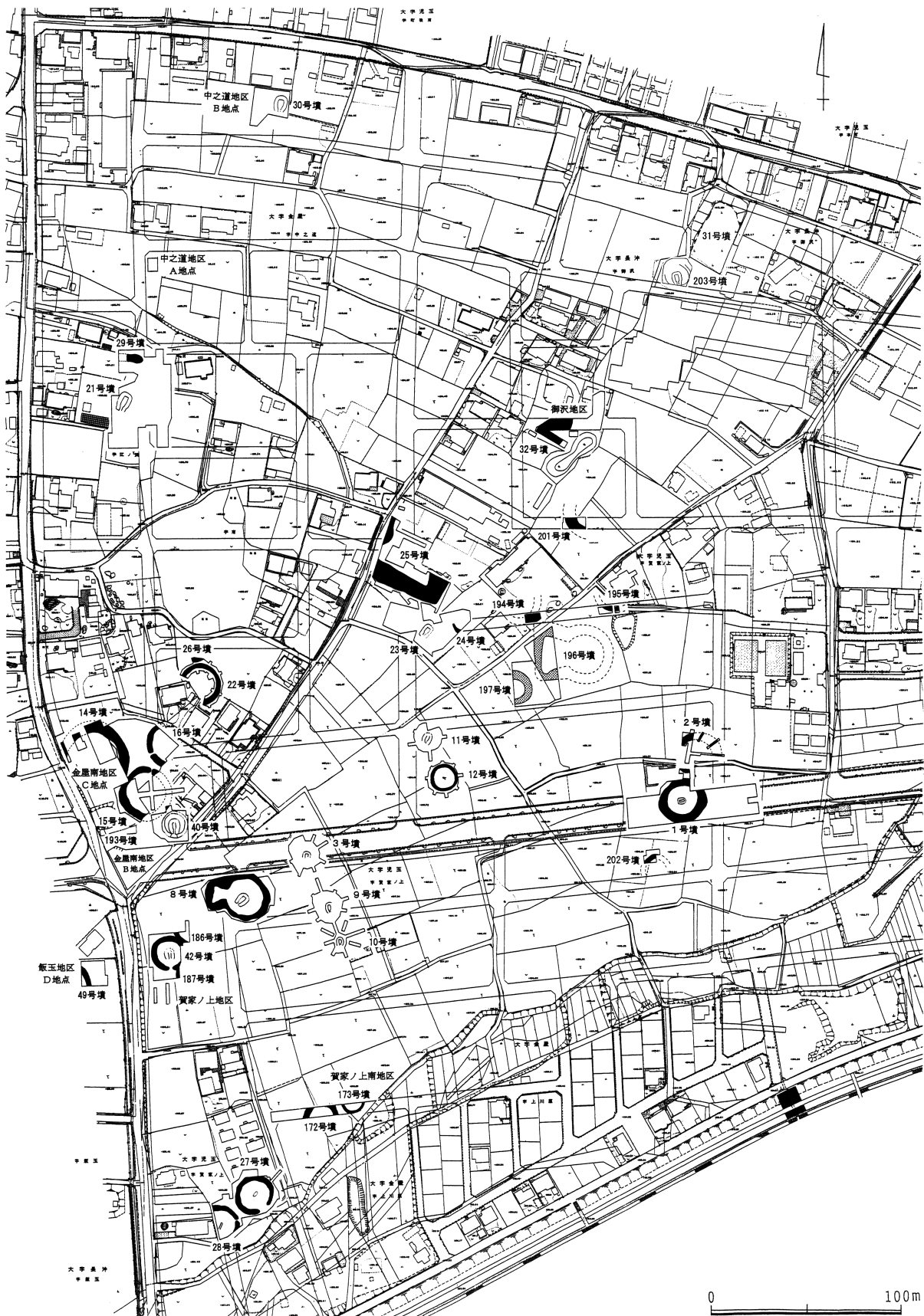


図4 長沖古墳群発掘調査・確認地点

第IV章 調査の成果

1 第194号墳

(1) 遺構 (図5～7)

第194号墳は、現地地表上の墳丘を完全に失い、試掘調査によって、はじめて存在が確認された古墳である。調査区は、古墳南東側の墳丘裾部から周堀にかけての範囲に該当する。調査区北西隅に墳丘裾部の一角を検出しているが、調査区内には、周堀外側の立ち上がりが確認されず、周堀上幅は6 m以上の規模を有することが推測され。周堀底面も平坦で、規則的な掘削が行われており、比較的規模の大きな古墳であったことが考えられる。墳形や墳丘規模を確認できるまでの材料はないが、長沖古墳群内の前方後円墳は、前方部を西または南西方向に向けるのが通例であることを考慮すると、南西側に第24号墳、南側に第196号墳が、近接して所在することから、墳形は前方後円墳ではなく、やや規模の大きな円墳を想定しておくのが妥当であろう。

堆積する土層は、第1～3層までが、墳丘部分と古墳周堀覆土の上位を被覆する土層、第4層以下が周堀の覆土と認識される。

第1・2層は近代以降の整地層である。第1層は、ロームブロックを主体とする土層で、ごく最近の客土と思われる。第2層は、旧道路の整地層で、とくに硬化が顕著である。第3層は、浅間A軽石を多量に含む近世以降の整地層で、色調は明褐色を呈し、以下の層との境界は明瞭である。墳丘部分

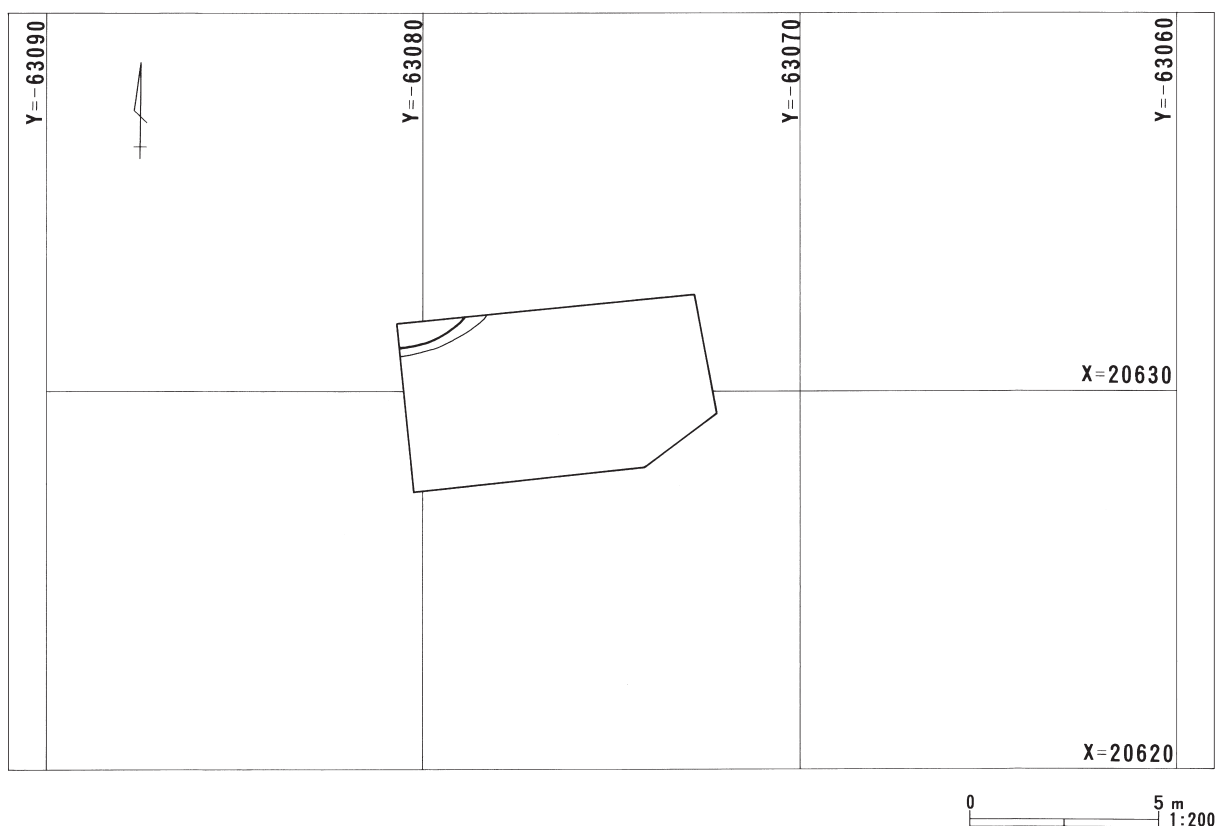


図5 第194号墳位置図

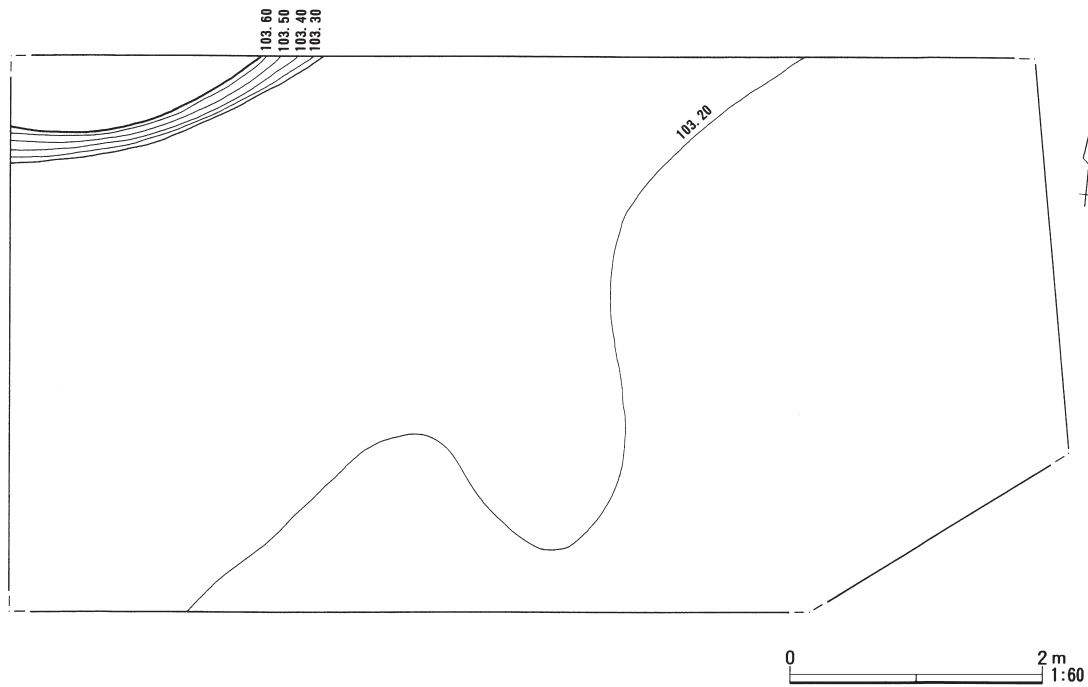


図6 第194号墳全体図

の地山を直接被覆するとともに、古墳周堀覆土である第5・7・8層を切って堆積している。第3層が敷かれた整地工事に際して、当時の地表面に対する掘削施工がなされていることが判明する。

第4層は、周堀の外寄りに堆積する土層である。暗褐色を呈し、混入物がほとんど見られないことから、第3層との識別が容易である。

第5層は、最下層を形成する第7・8層の上面を全体にわたって被覆する土層である。粘性が比較的高く、黒褐色を呈し、きわめて微細な黒色土ブロックを多量に含むとともにロームを主体とする微量の黄褐色粘質土ブロックの混入が見られる。

第6層は、浅間B軽石を主体とし、周堀覆土の最下層を形成する第7層の上面に、レンズ状に堆積する。この第6層は、少量の黒褐色土粒子を含むものの、ほぼ純層としてよく、浅間B軽石降下時に形成された層と考えてよいだろう。直下での第7層の層厚は10cmほどで、古墳築造後、浅間B軽石降下時までの周堀覆土の形成速度は、かなり緩いものであったことがわかる。

第7層は、墳丘東側の裾部から周堀底を広く被覆する土層で、有機質を多く含有して黒褐色を呈し、ロームを主体とする細かな黄褐色粘質土ブロックを少量含み、粘性は低い。堆積の状況からみて、墳丘側から流入した土を主体とするものようである。第8層は、墳丘から離れた南東寄りの周堀底を覆う土層で、色調は第7層よりも明るく、暗褐色を呈する。混入物がほとんど見られず、粘性も低い。第7層とは異なり、周堀の外側から流入した土と考えられる。第9層は、墳丘の立ち上がり部分において、三角形に堆積した黄褐色土である。周堀開削の直後に堆積した風化ロームを主体とする土層である。

第10層は、墳丘部分のローム層上面に堆積する地山層である。直上を浅間A軽石が含まれる近世以降の土層に直接被覆されており、このことから、墳丘は古墳時代の旧表土層を含めて削平されていることがわかる。

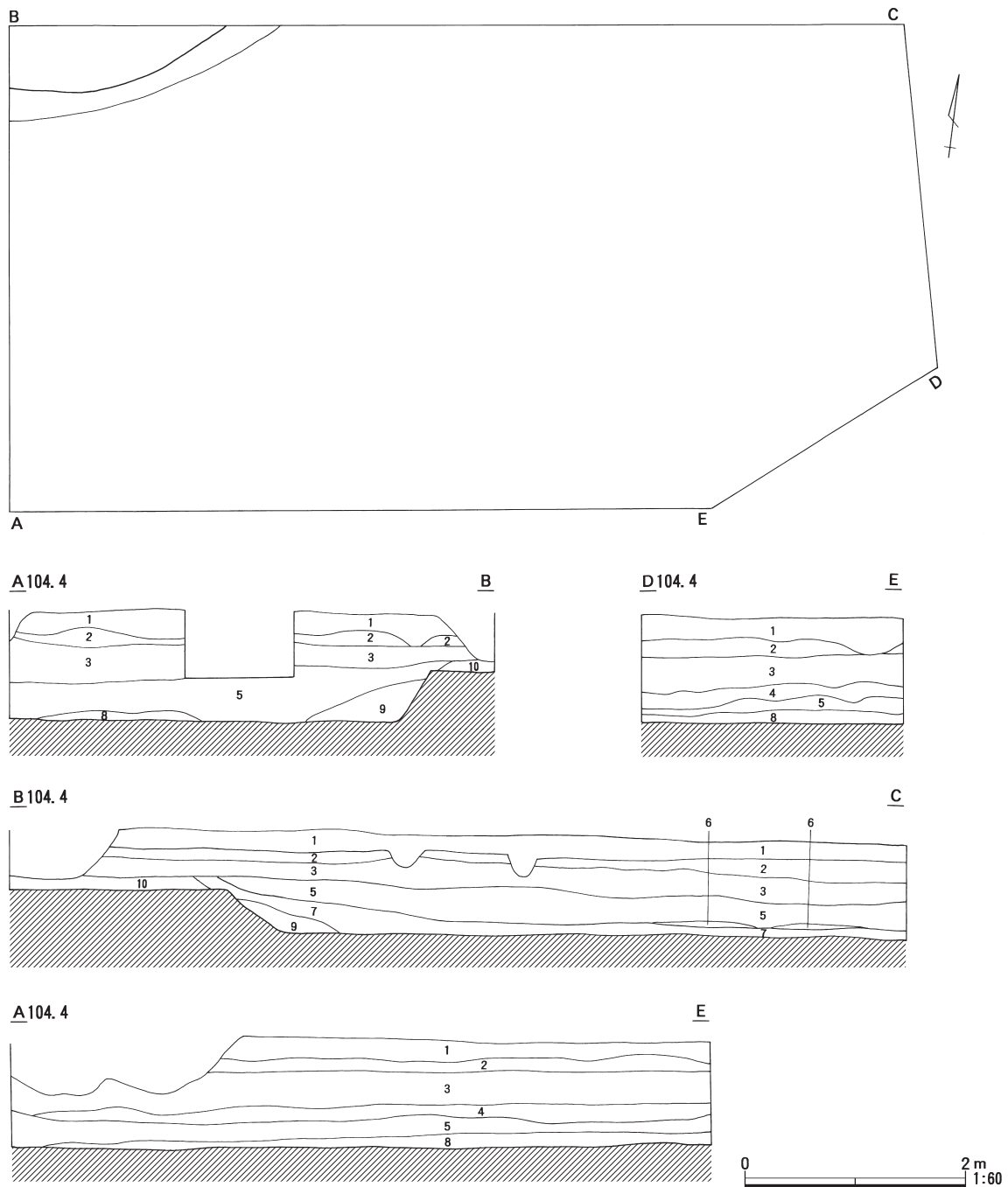


図7 第194号墳断面図

第194号墳周堀土層説明

- 第1層：明黄褐色土 ロームブロック主体の整地層。
- 第2層：暗灰褐色土 整地層。硬化顕著。旧道路面。
- 第3層：明褐色粘質土 浅間A軽石(～1mm)を多量に、片岩を主とする小礫を中量、炭化物粒子、焼土粒子(～1mm)を少量含む。
- 第4層：暗褐色粘質土
- 第5層：黒褐色粘質土 黒色土粒子(～1mm)を多量に黄褐色粘質土粒子(～4mm)を微量含む。粘性は高い。

- 第6層：淡褐色砂質土 浅間B軽石(～1mm)を主体とし黒褐色土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは弱く、粘性は低い。
- 第7層：黒褐色土 黄褐色粘質土の小塊(～2cm)少量含む。
- 第8層：暗褐色土
- 第9層：黄褐色粘質土
- 第10層：暗黄褐色粘質土

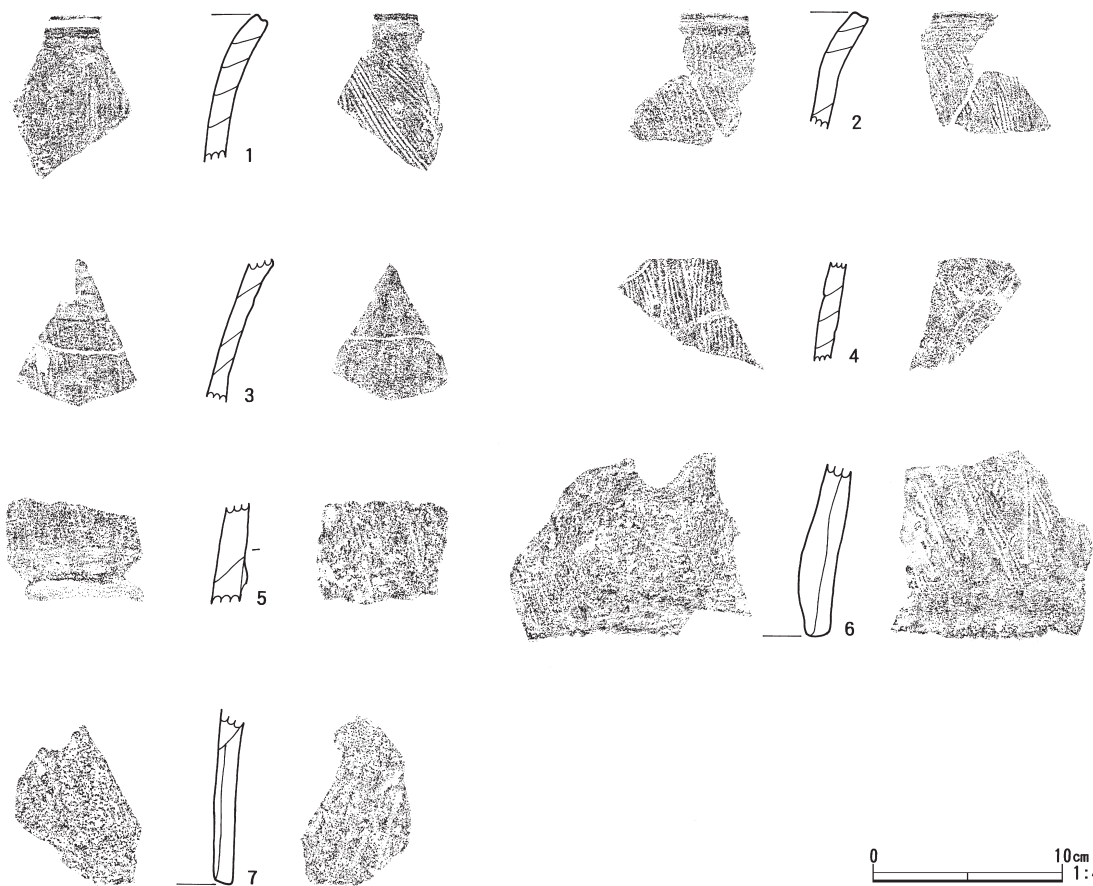


図8 第194号墳出土遺物（1）

（2）遺物

円筒埴輪（図8）

円筒埴輪は、全形の判明する資料に恵まれないが、推定される径の大きさから、いずれも二条突帯三段構成品と考えられる。口縁部基部突帯を含む破片がある。透孔の形状を確認できる破片は含まれない。朝顔形埴輪の肩部や口縁部にあたる破片は見あたらないが、胴部が含まれる可能性はある。焼成状態は、破片により差がある。色調は、全体ににぶい橙褐色を呈する。

1・2は口縁部を含む最上段の破片である。1は口唇部に強いナデ調整が加えられ、端面が窪み、凹線をなしている。1・2とも、内面には斜位のハケ調整が施されている。焼成もともに良好で、硬く焼き締まっている。3・4も、器壁の厚さや湾曲の度合いから見て、最上段の破片であろう。4の上端には、1・2とは異なり、円弧を描く刻線が観察される。

5は、突帯を含む破片である。突帯は、器壁の厚みからして第一突帯であろう。突帯断面は低平で頂点が丸味を帯びた三角形を呈し、撫で付けも甘い。内面には、縦位のナデ調整が施されている。

6・7は、基底部を含む最下段の破片である。最下部は、幅の広い2枚の粘土帯を表裏に合わせ、基部成形を行っているように観察される。底部調整は、外面には認められないが、内面には指による押圧を加え、器壁を薄くするような調整を行っている。押圧部より上位には、縦位のナデ調整が観察される。焼成はやや甘く、とくに7は、断面中央が黒色を呈し、他に比較して、明らかに低温で焼成されている。

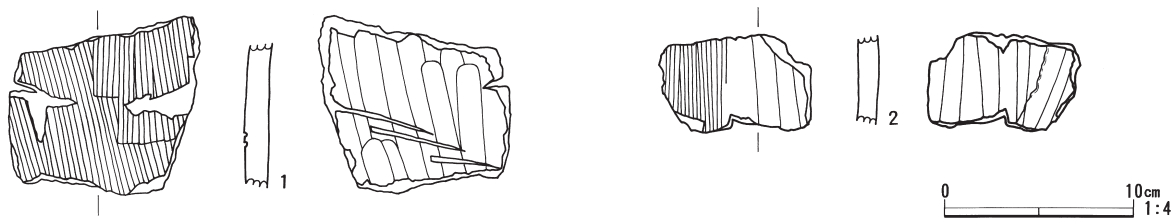


図9 第194号墳出土遺物（2）

形象埴輪（図9）

1・2ともに器種不明の破片である。1は、器壁が薄く、横方向へ緩やかに湾曲している。調整は、外面が縦位のハケ、内面が縦位のナデで、内面には、3条の板状工具の先端を当てたような痕跡が観察される。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は、内外面とも褐灰色を呈する。家形埴輪の屋根や壁体の一部である可能性がある。

2も、器壁が薄く、縦横両方向へ緩やかな湾曲を有している。調整は、外面が細かな縦位のハケおよびナデ、内面が縦位のナデである。内面の右端は剥離面となっている。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は甘く、焼き上がりはやや軟質である。色調は、外面が暗褐灰色、内面がにぶい橙灰色、断面が褐灰色を呈する。

2 第195号墳

（1）遺構（図10～13）

第195号墳も、現地表上の墳丘を完全に失い、試掘調査によって、はじめて存在が確認された古墳である。調査区は、古墳南側から南西側にかけての墳丘裾部と周堀にかかる範囲に該当する。調査区北端に検出した墳丘裾部は、やや歪んだ円弧を描いている。

墳丘の外周には周堀がめぐる。確認面での上幅は、2.1～2.7mと一定しない。堀底も平坦ではなく、深掘りされている箇所が見られる。現状から、墳形は円墳で、墳丘規模は直径12～13m程度と推定される。

周堀に堆積する土層は、A・Bの2地点で、様相が異なる。とくにB地点では上層が大きく掘削を受け、客土が分厚く堆積している。

A地点では、第1層である客土の敷き込みが薄く、第2層以下の土層は、比較的良好な状態を保持していた。

第2・3層は、混入物をほとんど含まず、調査区全体に安定的に堆積している土層で、古代末から近世前半までの間に形成されている。

第4層は、黒褐色の土層で、粘性があり、微細な焼土と炭化物の粒子とともに、1mm大の浅間B軽石を含有する。浅間B軽石は、純層を形成していないが、第4層は、同軽石降下後、さほどの時間を経ない段階に堆積した土層と思われる。

第5層と第6層は、ともに黒褐色を呈する土層であるが、墳丘寄りに堆積する第6層は、古墳の葺石と考えられる大きさの揃った多量の礫と少量の埴輪片を含んでおり、墳丘からの崩落土を主体に形

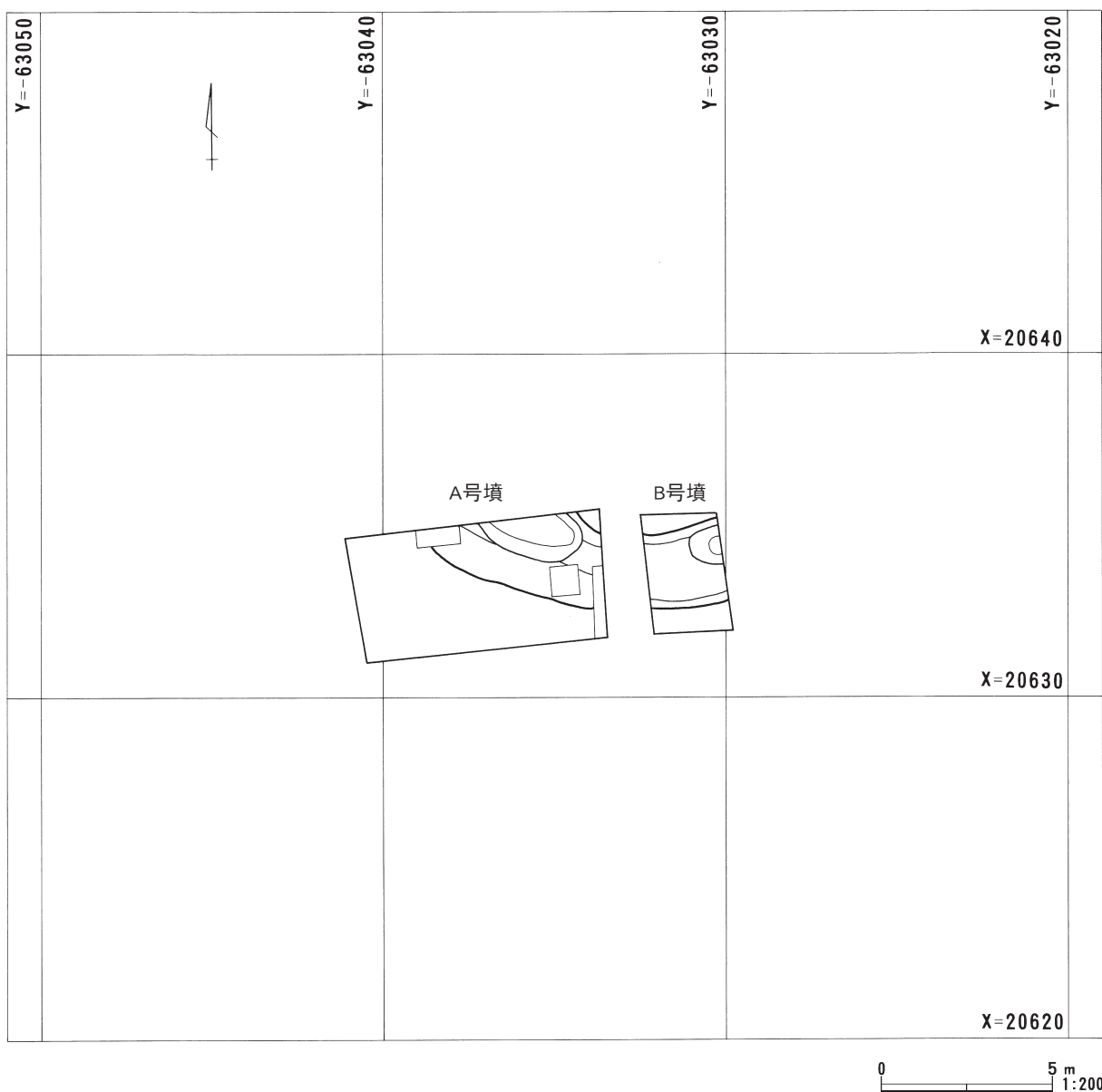


図10 第195号墳位置図

成された土層と判断される。第5・6層を被覆する第4層が、上述のように浅間B軽石を含有することから、墳丘の崩壊は、9・10世紀を中心とする平安期前半までの段階で進行していることが理解される。

第7層以下は、周堀底を直接被覆する土層で、このうち第10層は、黄褐色を呈し、粘性を有する土層で、周堀の立ち上がり部分において、三角形に堆積する。周堀開削の直後に堆積した風化ロームを主体とする土層である。

一方、B地点では、周堀外側の立ち上がり部分を中心に本来の堆積土が大きく削られ、客土が入り込んでいる。

第2層は、葺石と考えられる礫が少量含まれるが、軟弱な土層で、形成の時期は比較的新しいと思われる。

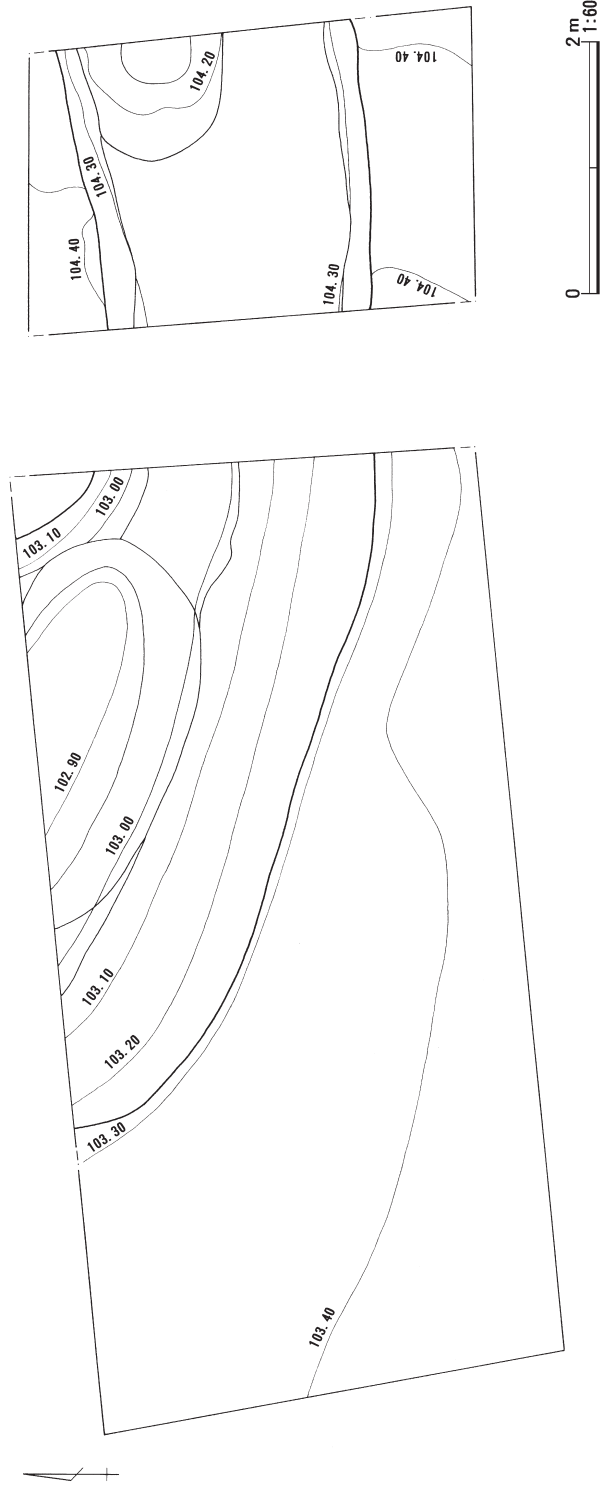


图11 第195号填全体图

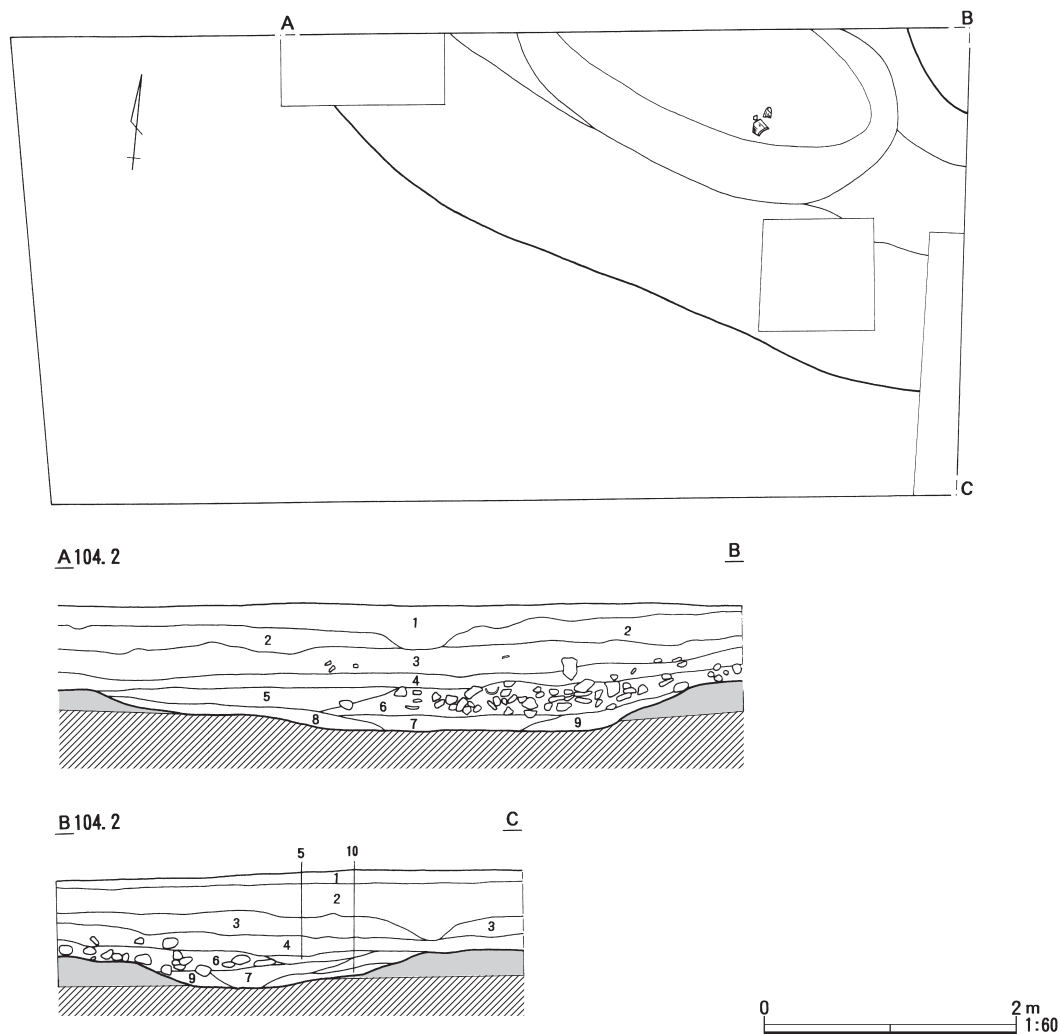


図12 第195号墳A地点断面図

第195号墳A地点周堀土層説明

第1層：客土

第2層：暗灰色土

第3層：明褐色粘質土

第4層：黒褐色粘質土 焼土粒・炭化物粒(～1mm)・浅間B
軽石(～1mm)を均質に中量含む。

第5層：黒褐色土

第6層：黒褐色土 礫(～20cm)を多量に、埴輪片を少量含む。墳丘流入土。

第7層：黒黄褐色土 黄褐色土小塊(～1cm)を少量含む。

第8層：暗褐色土 外側立ち上がりの風化土。

第9層：暗褐色土 内側立ち上がりの風化土。

第10層：黄褐色土 黒色土粒子(～1mm)を微量含む。外側立ち上がりの風化土。

第3層は、浅間B軽石を含み、A地点の第4層に対応する。下位の第4～6層を切って堆積しており、近世以降の比較的新しい時代に形成された土層である。

また、第4層は、葺石と考えられる大きさの揃った礫とともに、古墳時代の旧表土層である黒色土の混入が観察されることから、墳丘の崩落土と判断される。A地点の第6層に対応する土層と考えられる。

第5・6・7層は、いずれも暗褐色を呈し、含有物は微妙に異なるものの、一連の形成過程にあった土層と判断される。第8・9層は、明褐色を呈し、粘性を有する土層で、風化ロームを主体とし、A地点の第10層に対応する。

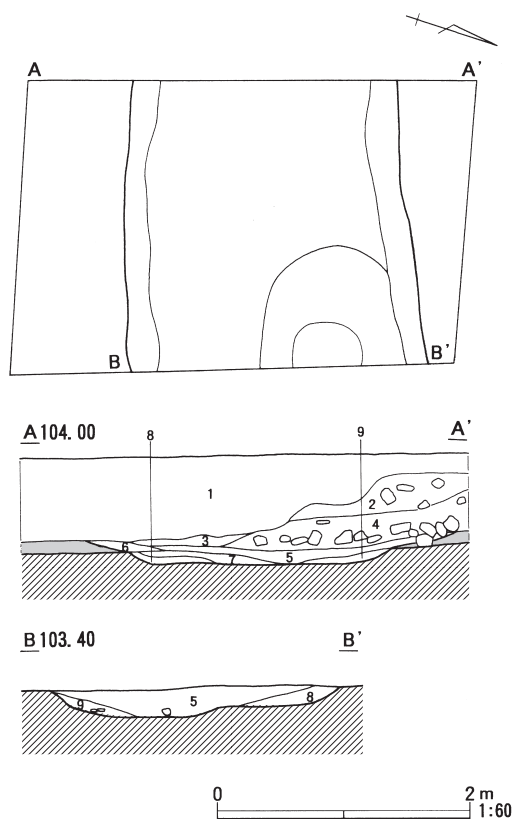


図13 第195号墳B地点断面図

第195号墳B地点周堀土層説明

- 第1層：客土
 第2層：暗灰褐色土 礫(～20cm)を少量含む。しまりは、やや弱く、粘性は低い。
 第3層：黒褐色土 浅間B軽石(～1mm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。
 第4層：黒褐色土 礫(～25cm)を中量含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。
 [第3層に比べ黒く、旧表土が混入している墳丘崩落土層]
 第5層：暗褐色粘質土 礫(～4cm)を微量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。
 第6層：暗褐色粘質土 明褐色土小塊(～1cm)を少量含む。しまりは、やや強く、粘性は高い。
 第7層：暗褐色粘質土 明褐色土粒子(～1mm)を少量含む。しまりは、やや強く、粘性は高い。
 第8層：明褐色粘質土 明褐色粘質土を主体とし、暗褐色土小塊(～1cm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。
 第9層：明褐色粘質土 明褐色粘質土を主体とし、暗褐色土粒子(～1mm)を微量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

(2) 遺物

遺物は、礫を含んだ墳丘からの崩落土の中で、少量の土師器と埴輪片を検出している。

土師器 (図14)

小型の壺と思われる底部から胴部中位にかけての破片である。底部周辺は分厚く成形され、外底面は小さく、胴部との境界は明瞭ではない。調整は、外面が不定方向のナデ、内面が横位ないし斜位のナデである。胎土には砂礫を多く含み、焼成は良好である。色調は全体に橙褐色を呈するが、胴部の外面に、黒斑が観察される。

形象埴輪 (図15)

1は、大刀形埴輪の護拳部から剥落した三輪玉である。中央を半球状に成形し、括れを隔てて両側を摘み上げ、外側には平端な面を造り出している。裏側は剥離面となっている。半球の中央には、棒状工具の刺突による直径3mm程の穿孔が存在する。穿孔は、径を減ずることなく貫通していることから、護拳部にも及んでいることは明らかである。胎土には細砂粒を多く含み、焼成はやや甘く軟質である。色調はにぶい橙褐色を呈する。2は、靫の矢を表現する部分である。矢は粘土紐貼付による表現で、逆台形の粘土板に貼付されている。現状で2本の矢が残る。粘土板の裏面には上下方向に突帯状の補強帯が貼付されている。調整は、粘土板の正面が縦位のハケ、裏面が縦位のナデで、矢と裏面の補強帯は、ともに軸線に沿ったナデ調整となっている。胎土には細砂粒を多く含み、焼成はやや甘く軟質である。色調は全体に橙褐色を呈する。

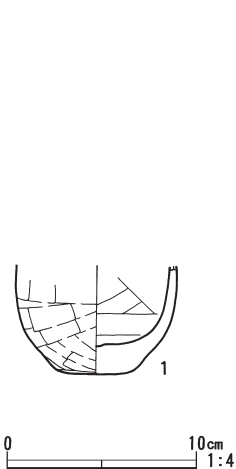


図14 第195号墳出土遺物（1）

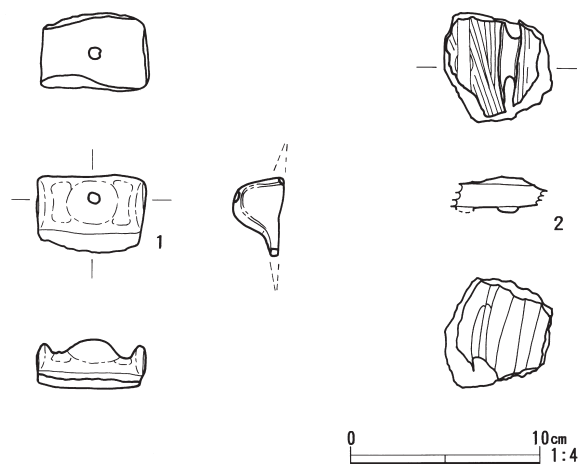


図15 第195号墳出土遺物（2）

3 第196号墳

(1) 遺構 (図16)

範囲確認調査により新たに存在を確認した古墳である。検出したのは、前方後円墳の前方部先端とそのまわりの周堀にあたる部分である。調査の性格上、古墳の周堀は掘削を遺構確認面までの範囲にとどめ、墳丘の裾部にあつて、地表から確認面までが浅く、以後の耕作により影響の及ぶことが予想されたSK-1については、部分的に詳細確認調査を実施した。

第196号墳は、前方部をほぼ真西に向け、確認面で計測した規模は、墳丘前方部幅約20m、周堀幅は前方部前面で3～5m、前方部側面南側隅で3.2m、同北側で5m以上である。前方部南側の周堀外側の設計線は、直線をなすことから、周堀の平面形状は、墳丘相似形ではなく、盾形を呈するようである。

SK-1は、前方部前端の北寄りに検出した円筒埴輪棺を収容するための土坑である。平面形は、隅の丸い長方形をなし、長径1.2m、短径0.65mの規模を有する。確認面からの深さは、最深部で24cmである。軸線は、前方部前面の設計線に並行せず、N-35°-Wを示す。覆土は2層に区分され、上層に1mm大の黒色土粒子を含む黄褐色土、下層にも、上層よりやや大きい4mm大の黒色土粒子を含む黄褐色土が堆積する。

(2) 遺物

円筒埴輪 (図17・18-1～41)

円筒埴輪は、破片資料のみであるが、推定される径の大きさから、いずれも二条突帯三段構成品と考えられる。外面調整は一次タテハケのみで、二次調整を施す個体は含まれない。内面調整は、口縁部に斜位ハケが目立つ。他の部位では、斜位および縦位のナデが主体である。胎土は精製され、砂粒をほとんど含有しない。焼成も良好で、色調はにぶい橙褐色を呈する。

1～13は、口縁部の破片である。口縁部には、内面と端面に強いナデが施され、とくに端部には凹面が形成されている個体が多い。

14～22は、透孔を含む破片である。14～20は上端部が水平に切り抜かれていることから、円筒埴輪

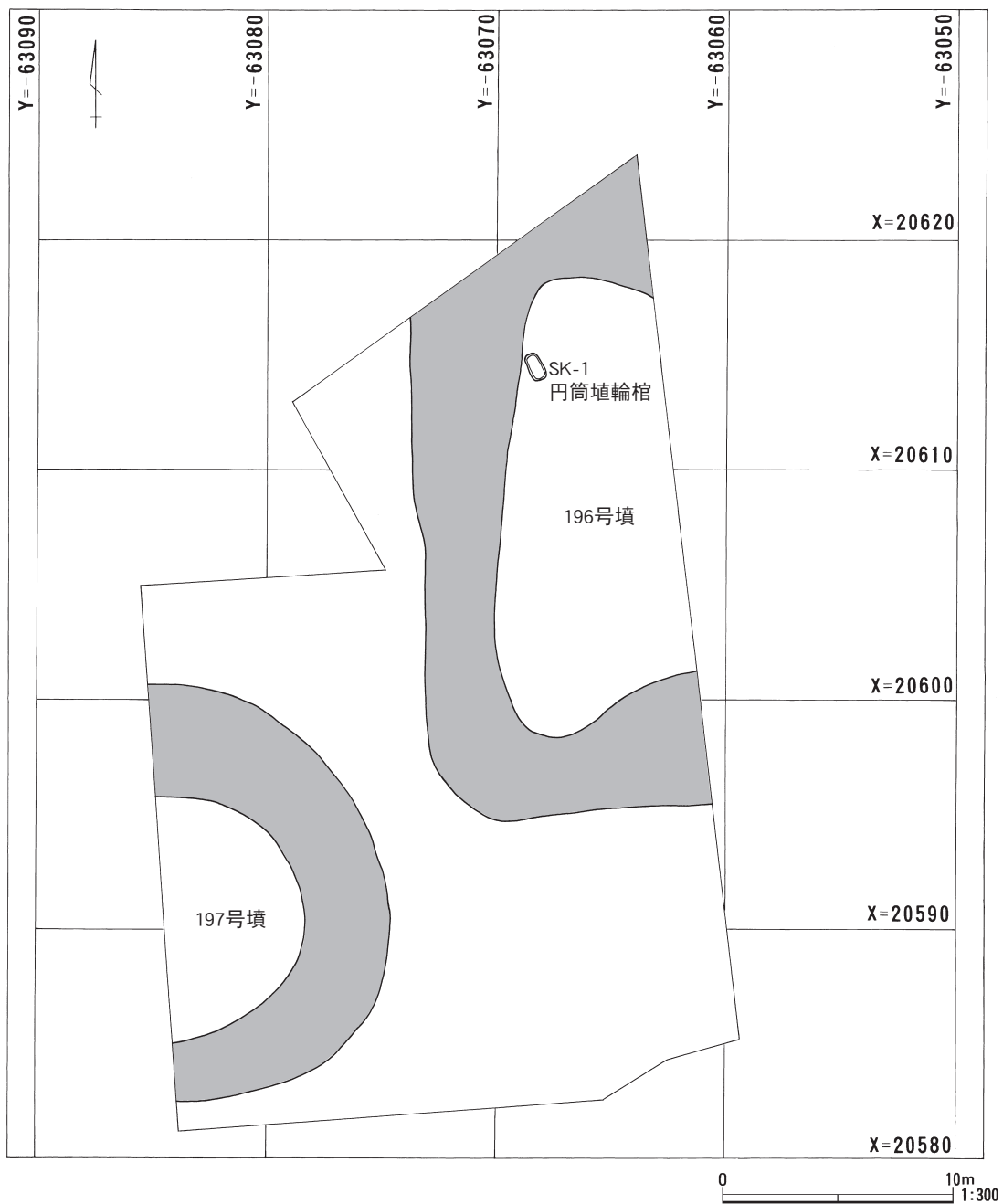


図16 第196・197号墳位置図

棺に転用された3個体と同様に、半円形の透孔であったと推定される。21・22は、透孔下半の一部で、円弧を描いて切り抜かれている。円形ないし他と同様の半円形の透孔であったろう。

14～29は、突帯を含む破片である。突帯断面は、15のような台形、17のようなM字形を呈するものもあるが、多くは三角形もしくはそれに近い形状で、簡略化が進行している。

30～34は、透孔、突帯を含まない中間段の破片で、いずれにも外面に刻線が存在する。30には「×」形の刻線が観察される。31から34にも全体の形状が不明ながら刻線が見られる。とくに、34は小片ながら3条の刻線が交差している。

35～41は、基底部を含む破片である。すべての個体で、幅の広い2枚の粘土帯を表裏に合わせ、基

部成形を行っている。基底部最下端が自重により変形している固体もあるが、底部調整を確認できる例は存在しない。

朝顔形埴輪（図18－42～47）

破片資料のみであるが、推定される径の大きさから、円筒埴輪と同様に、胴部二条突帯の製品と考えられる。外面調整は一次タテハケのみで、二次調整を施す個体は含まれない。内面調整は、斜位および縦位のナデで、粘土帯の積み上げ痕が目立つ。円筒埴輪と異なり、胎土には、砂礫が含まれる。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。

42～46は、いずれも肩部から胴部最上段にかけての破片である。42・43には半円形の透孔が存在する。肩部は円弧を描かず、ほぼ直線的に立ち上がって頸部へ移行している。47は頸部の破片で、断面台形の突帯がめぐる。

円筒埴輪棺（図19～23）

SK－1内部の円筒埴輪棺は、3個体の円筒埴輪からなる。No.1とNo.2の2個体は、棺の本体で、口縁部を合わせ口として、横位に安置されている。この際、合わせ口とした円筒埴輪棺の状態を維持するために、SK－1の掘り方に対して、第2層とした黄褐色土を充填している。そのうえで、No.3を分割し、開口している透孔と底部に当てて、これを閉塞している。棺の本体であるNo.1とNo.2の透孔は、横方に向けられているわけではなく、一方が斜め上方、他の一方が斜め下方を向き、それぞれNo.3の小片で塞がれている。

円筒埴輪棺に転用された3点は、いずれも二条突帯三段構成品である。外面調整は1次タテハケのみで、二次調整を欠くこと、透孔が半円形であること、第二段の外面に、透孔と90°前後ずれて「×」状の刻線が存在することなどが共通している。また、胎土、焼成、色調も同様であることから、同時製作された資料と判断される。

円筒埴輪棺の主体部分をなすNo.1、No.2には、口縁部を中心に欠損箇所があり、断面の磨耗が観察される。一定期間、古墳に樹立された状態の円筒埴輪を利用転用したことが想定される。透孔の形状や胎土、色調などが共通することから、第197号墳に樹立されていた円筒埴輪を転用したことが推測される。

なお、円筒埴輪棺の内部には、空間はなく、周囲と同じ黒色土粒子を含む黄褐色土が詰まっていた。人骨は依存せず、副葬品も皆無であった。

4 第197号墳

(1) 遺構（図16）

他の古墳と同じく、盛土をすでに失い、範囲確認調査によって新たに存在を確認した古墳である。墳丘の一部と、それをめぐる周堀を検出した。墳丘の西側部分には調査が及んでいないが、墳形は墳丘規模と周堀外縁の形状から、小型の円墳と推定される。いずれも確認面で、墳丘は径10.5m、周堀幅は北側で約5m、東側で3.5m、南側で2.75mの規模を計測する。

(2) 遺物

遺物は検出されていない。同じ条件で検出された第196号墳では、一定量の埴輪片を検出していることを考えると、第197号墳は、埴輪を伴わなかった可能性が高い。

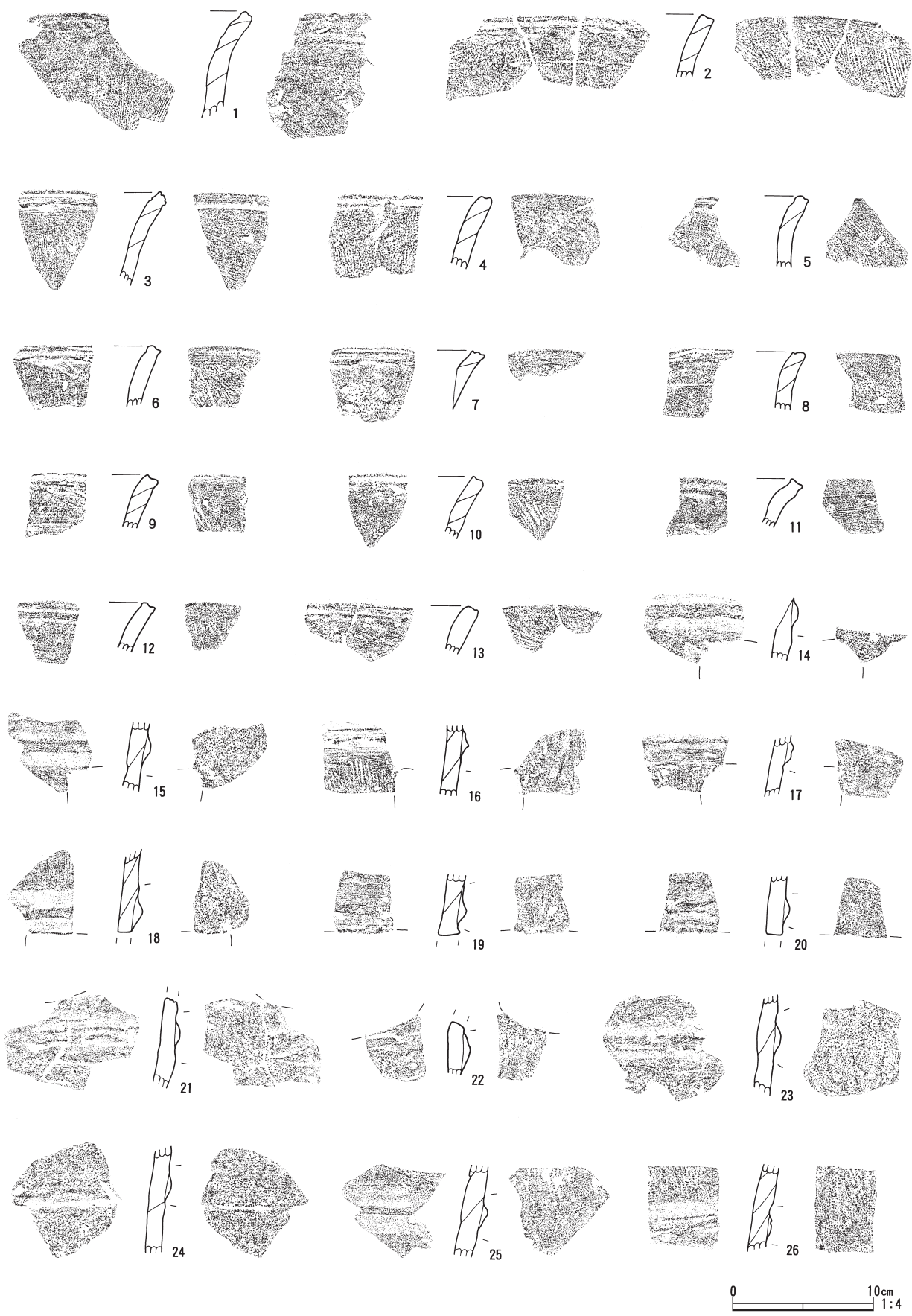


图17 第196号填出土遗物（1）

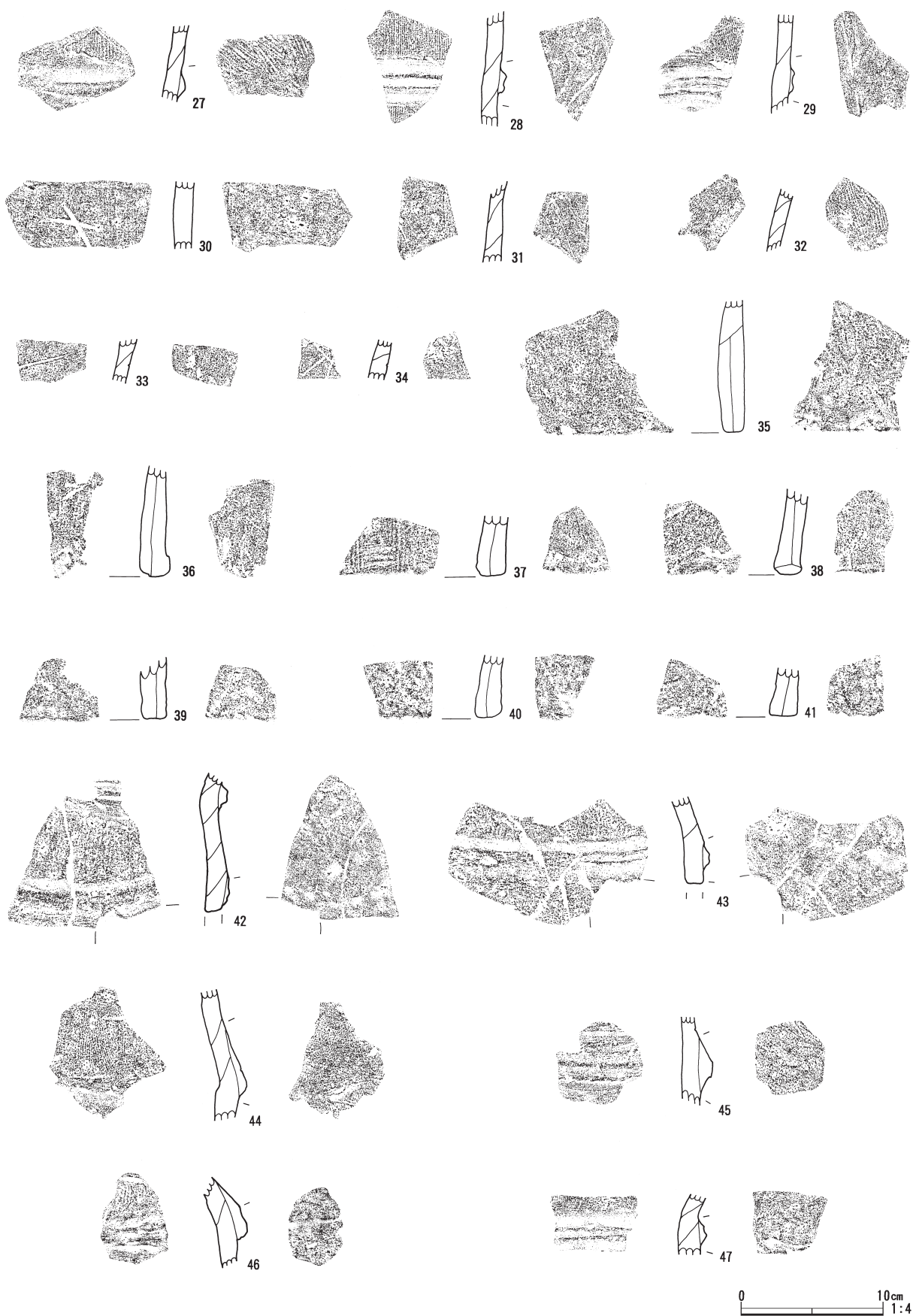
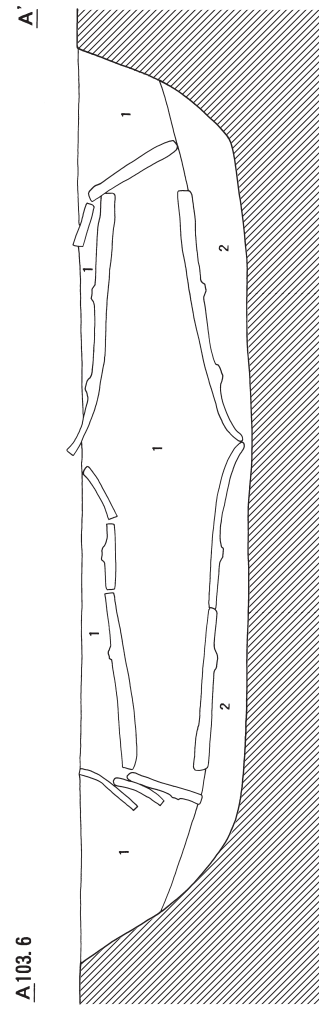
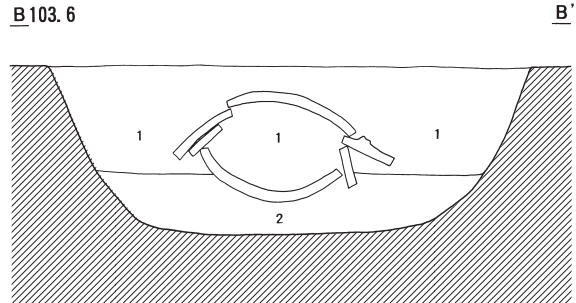
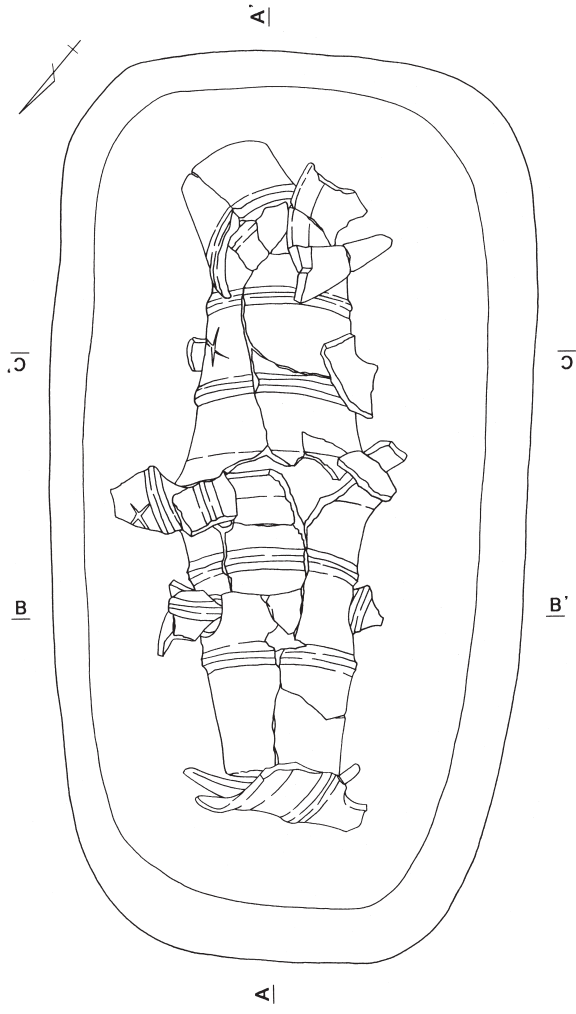
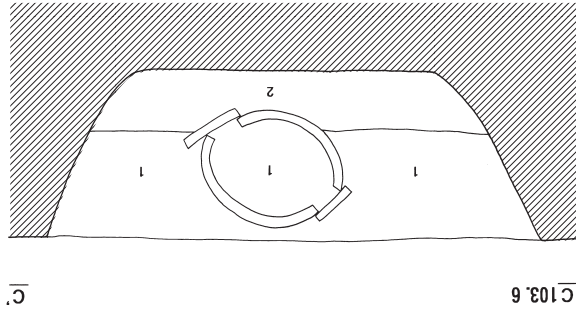


图18 第196号填出土遗物（2）



第196号墳 SK - 1 土層説明

第1層：黄褐色粘質土 黒色土粒子 (~1 mm) を含む。

第2層：黄褐色粘質土 黒色土粒子 (~4 mm) を含む。

図19 第196号墳 SK - 1 断面図

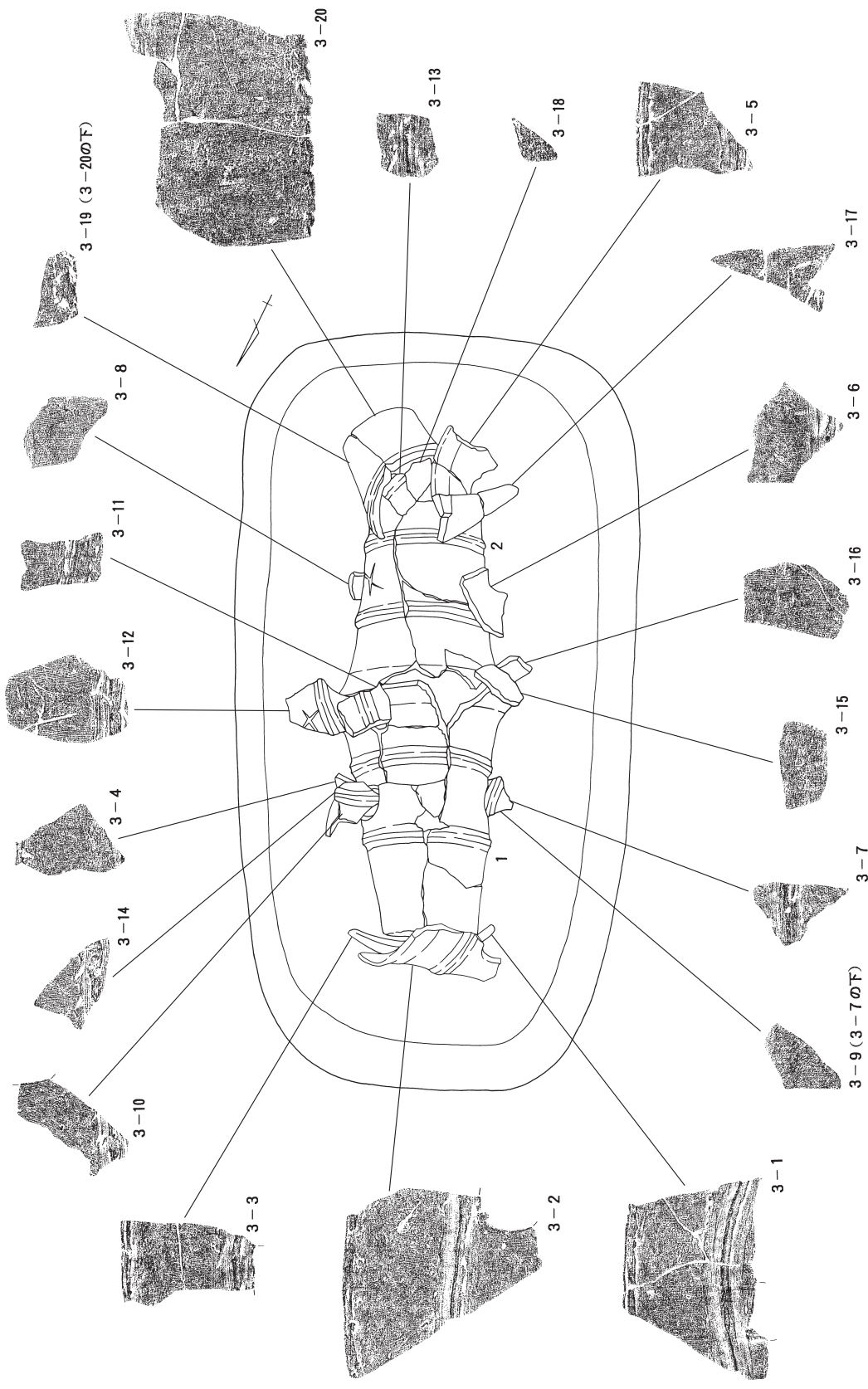
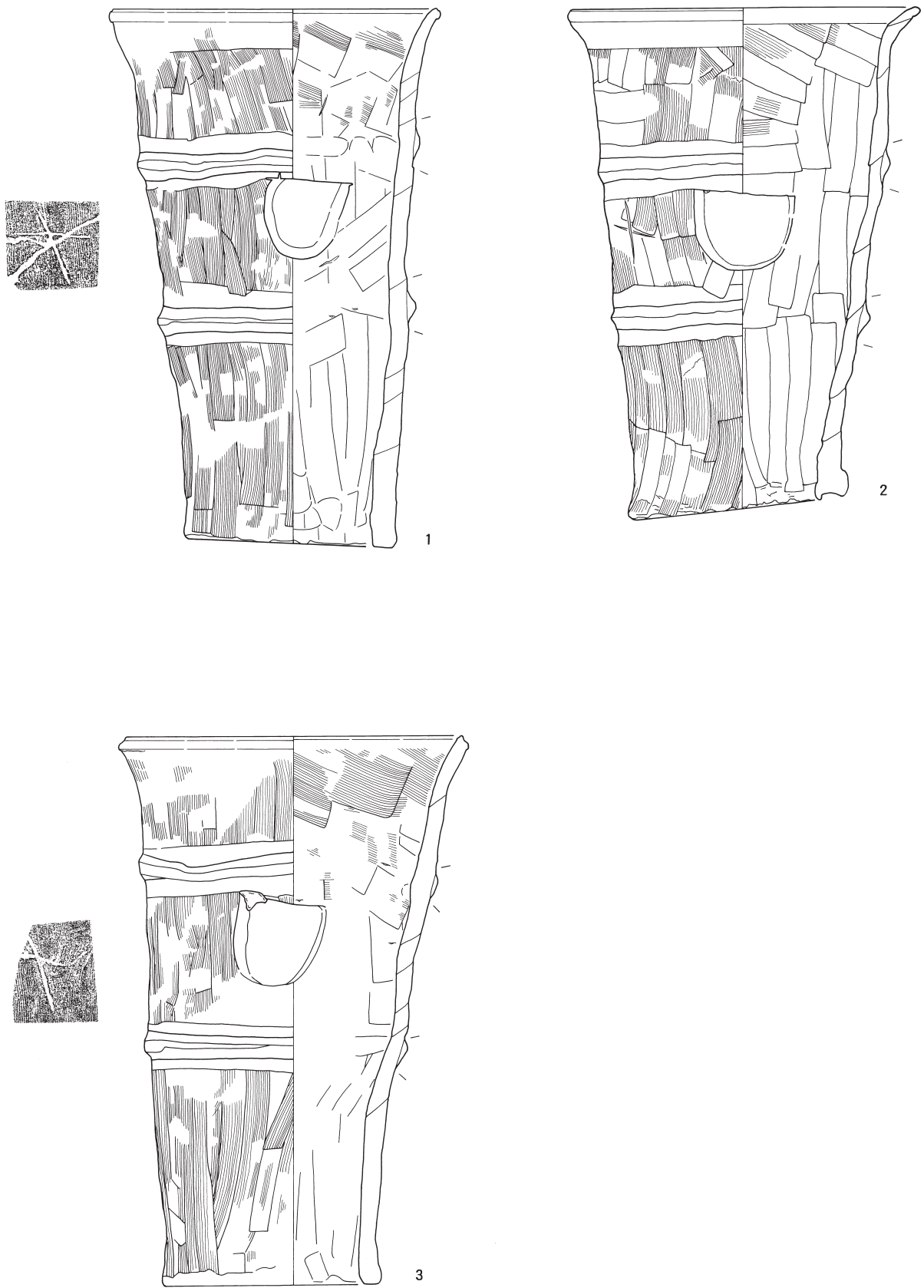


图20 第196号墳 SK - 1 出土遺物 (1)



0 10cm 1:4

图21 第196号填 SK - 1 出土遗物 (2)

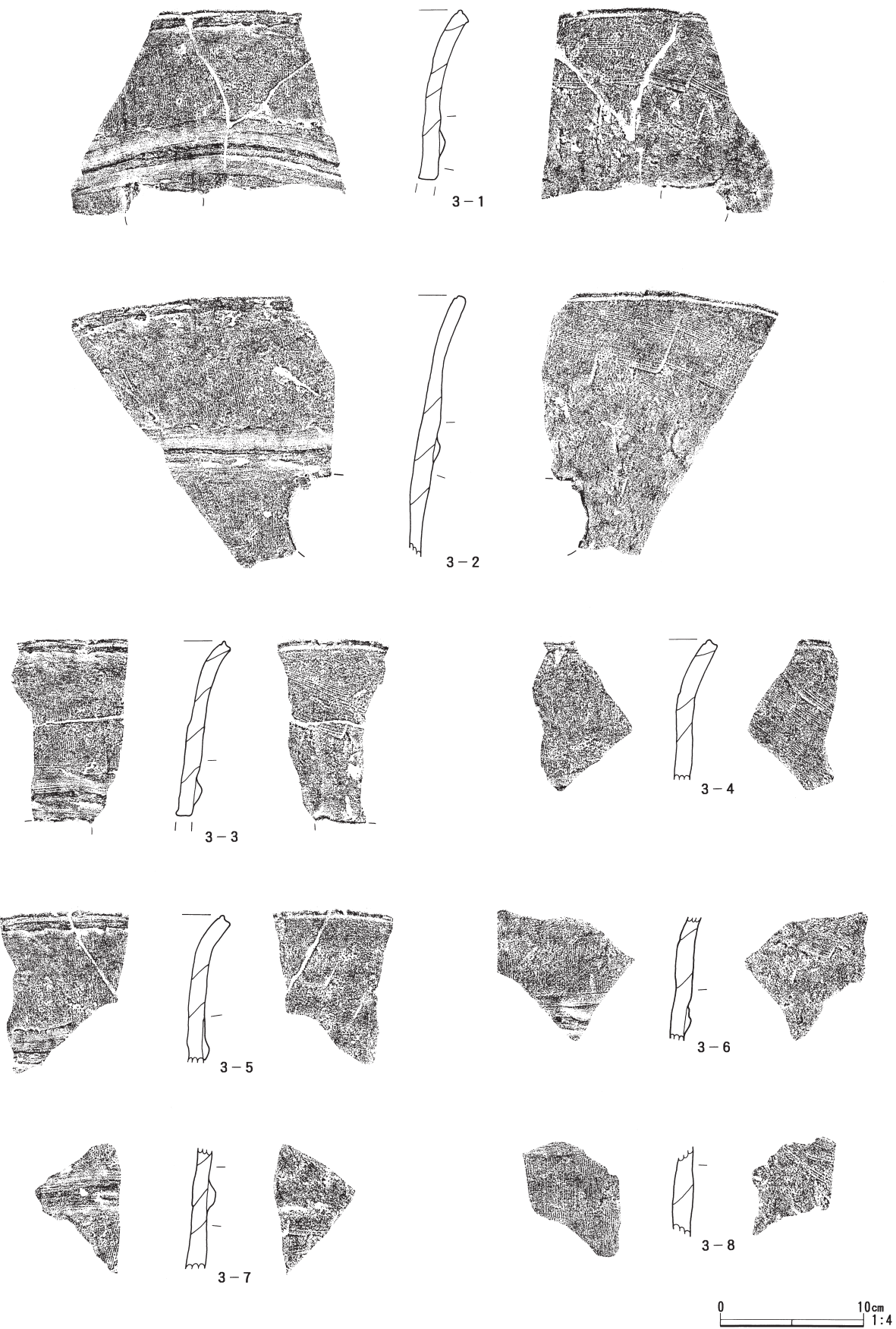


图22 第196号填 SK - 1 出土遗物 (3)

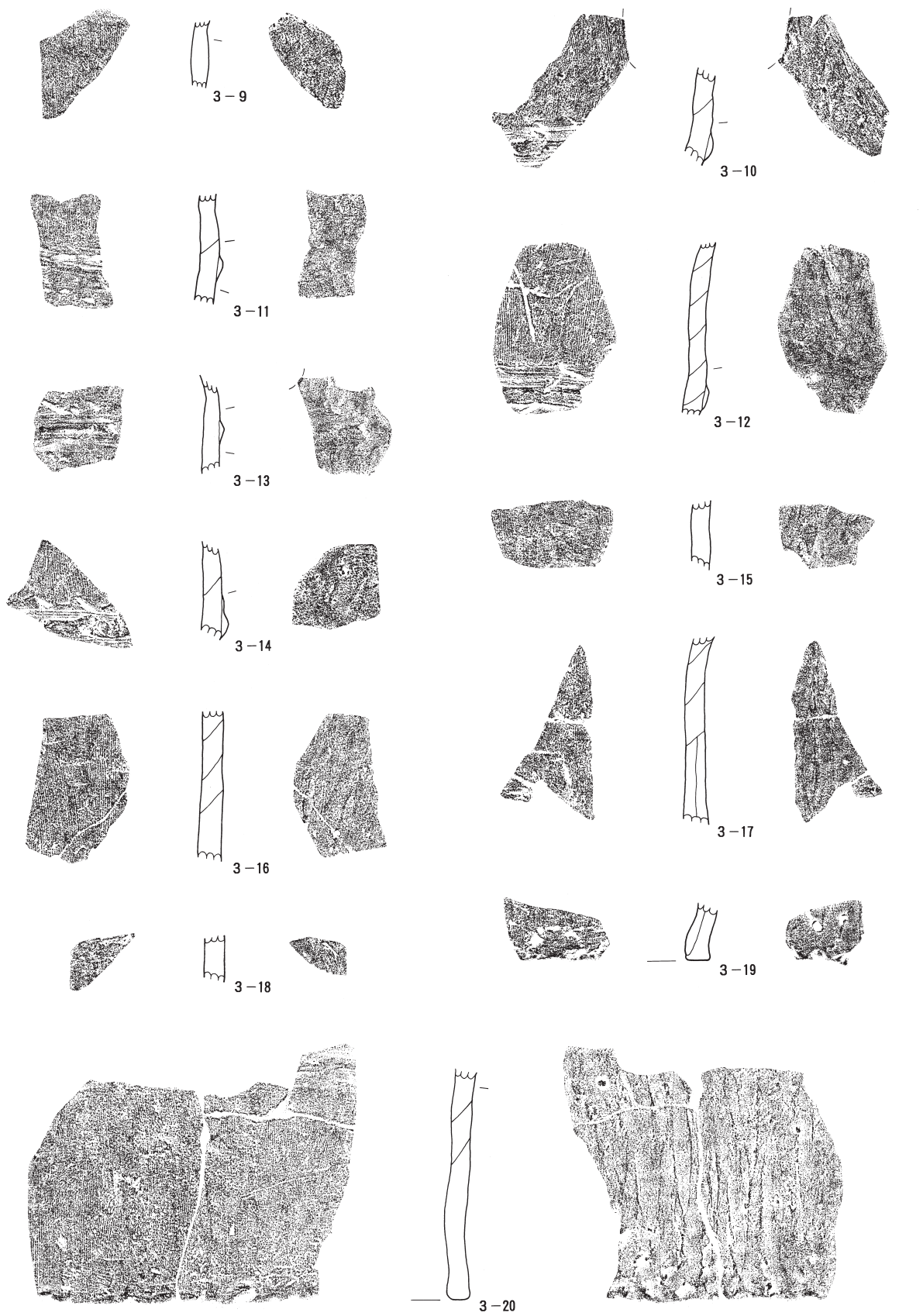


图23 第196号填 SK - 1 出土遗物 (4)

5 第201号墳

(1) 遺構 (図24～27)

第201号墳も、現地地表上の墳丘を完全に失い、試掘調査によって、はじめて存在が確認された古墳である。調査区は、古墳南西側から西側にかけての墳丘裾部と周堀にかかる範囲に該当する。調査区内に検出した墳丘裾部は、やや整った円弧を描いている。

墳丘の外周には周堀がめぐる。確認面での上幅は、6 m前後を計測する。堀底は平坦であるが、調査区南壁寄りの一角には、深掘りされている箇所が見られる。確認面からの深さは、1.5m前後あり、ローム層を掘り抜いて、その下の礫層にまで達している。墳形は円墳で、墳丘規模は直径20m前後と推定される。

周堀に堆積する土層は、A・Bの2地点で、様相が異なる。とくにB地点では上層が大きく掘削を受け、客土が分厚く堆積している。

第1～3層は、遺構確認面の土層を覆う土層で、ほぼ水平に堆積している。第1層は、第2層の上面を削りこんで敷かれた近年の客土である。第2・3層は、ともにしまりが弱く、かつての耕作土と考えられる。とくに、第2層には浅間A軽石が多量に含まれていることから、形成時期は近世に下ることが明らかである。

第4層以下は、周堀の覆土である。第4層は周堀の最上層を全面的に被覆する土層で、分厚く堆積する。礫、焼土、炭化物のブロックを含み、粘性が高い。



図24 第201号墳位置図

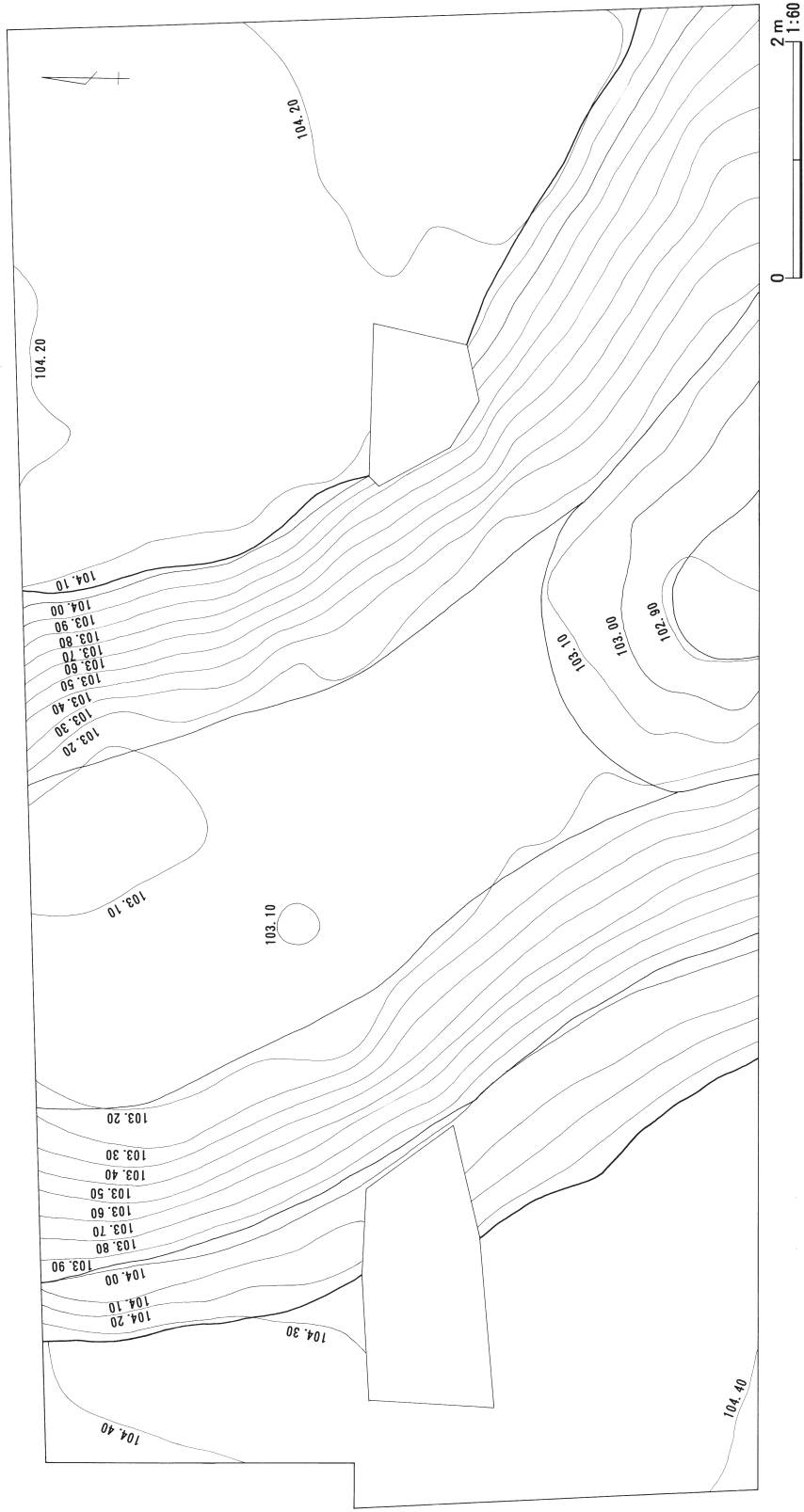


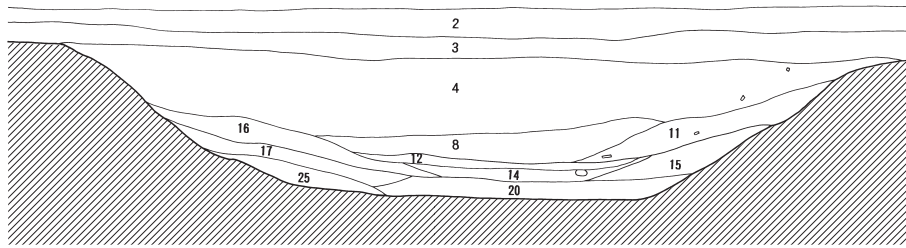
图25 第201号填全体图



图26 第201号填断面图(1)

A103.6

A'



B103.6

B'

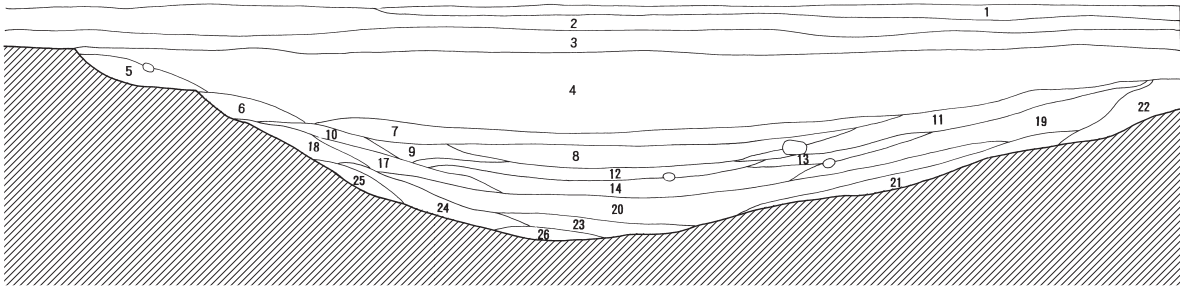
0 2 m
1:60

図27 第201号墳断面図（2）

第5・6層は、ともに周堀外側立ち上がり面の上位に認められる土層で、調査区の南壁のみに確認される。黄灰褐色を呈し、ロームを多く含んでいることから、周堀立ち上がり上位部の崩落土と判断される。

第7層は、礫、焼土、炭化物のブロックを含み、粘性が高く、第4層に類似した土層であるが、やや茶色味が強い。

第8・9層は、ともに黒褐色を呈し、粘性が高い。第8層は、浅間B軽石を多く含み、全体にザラザラしている。これに対し、第9層も、同様の色調を示すが、浅間B軽石が含まれない。なお、第8層は、周堀の中層に安定して堆積している土層で、埴輪片や葺石と思われる礫も含まれ、浅間B軽石降下後ほどなくして、墳丘の崩落が進行したことが窺える。

第10・11層は、暗褐色を呈し、第8・9層と同じく粘性が高い。周堀中層の立ち上がり部分に発達した土層で、このうち墳丘側に堆積する第11層には、小礫とともに、葺石と思われる拳大の礫が少量含まれる。

第12層は、上下の各層に比べ、明らかに灰色がかっている。

第13～17層までは、いずれも礫を含んで暗褐色を呈する。第13層には、砂粒が多く含まれる。

第18層は、第5・6層と同様に、黄灰褐色を呈し、ロームを多く含んでいることから、周堀立ち上がり上位部の崩落土と判断される。

第19・20層は、ともに砂礫を多量に含み、暗褐色を呈する。とくに、第20層は、周堀下層部に安定的に発達した土層で、北壁付近では、堀底を直接被覆している。また、少量ながら、埴輪片を含んでいる。

第21層は、墳丘側立ち上がりの斜面を被覆する土層で、暗褐色を呈する。第20層に比べ、砂礫の含有量が少なく、替わってロームを一定量含んでいる。

第201号墳周堀土層説明

第1層：客土

第2層：暗灰褐色土 浅間A軽石(～1.5mm)を多量に、礫(～1cm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性ともになし。旧耕作土。

第3層：暗灰褐色粘質土 小礫(～1.5cm)を中量含む。しまりはやや弱く、粘性はやや高い。旧耕作土。

第4層：暗灰褐色粘質土 3層に準ずるが、色調がやや暗く、小礫(～3cm)を中量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。焼土・炭化物粒子(～2mm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第5層：暗黄灰褐色土 黄褐色粘質土を多量に含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。周溝立ち上がり上位部の崩落土。

第6層：暗黄灰褐色土 黄褐色小礫(～1.5cm)を多量に含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。周溝立ち上がり上位部の崩落土。

第7層：暗褐色粘質土 小礫(～1cm)、焼土・炭化物粒子(～2mm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第8層：黒褐色粘質土 浅間B軽石(～1mm)を含む。埴輪片・棒状礫を含む。埴輪片の中には、基部を含む。

第9層：黒褐色粘質土 8層に準ずるが、浅間B軽石を含まない。粘質は高い。

第10層：暗褐色粘質土 礫(～8mm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第11層：暗褐色粘質土 礫(～1.5cm)を含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第12層：黒灰褐色粘質土 礫(～5mm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第13層：暗褐色粘質土 12層に準ずる。やや砂質。礫(～1.5cm)を含む。しまりはやや強く、粘性は、高い。

第14層：暗褐色粘質土 礫(～5mm)を微量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第15層：暗褐色粘質土 礫(～1.5cm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。

第16層：暗褐色粘質土 砂粒(～1mm)、礫(～2cm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第17層：暗褐色粘質土 礫(～1cm)を含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第18層：黄灰褐色粘質土 礫(～5mm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第19層：暗褐色粘質土 礫(～1.5cm)を多量に含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第20層：暗褐色粘質土 礫(～3cm)を多量に含む。しまりはやや強く、粘性は高い。埴輪片を含む。

第21層：暗褐色粘質土 砂粒(～1mm)を多量に含み、礫(～1cm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性は高い。

第22層：黄褐色砂礫土 暗褐色粘質土粒子(～1mm)を含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。

第23層：暗褐色粘質土 砂粒(～1mm)を少量、礫(～5mm)を微量含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。

第24層：暗褐色粘質土 礫(～5mm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。

第25層：明褐色粘質土 砂粒(～1mm)を多量に含み、礫(～5mm)を少量含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。

第26層：明褐色粘質土 砂粒(～1mm)、礫(～5mm)を含む。しまりはやや強く、粘性はやや高い。

第22層も、墳丘側立ち上がりの上位に堆積し、砂礫を含まず、ロームを多く含有して、黄褐色を呈する。

第23～26層は、調査区南壁奇りの深掘り箇所最下層に堆積する土層である。第23・24層は、暗褐色粘質土で、砂礫を少量含んでいる。第25・26層は、明褐色粘質土で、同じく砂礫を含んでいるが、含有量は、第23・24層よりも多い。

(2) 遺物

遺物は少量の埴輪片を検出している。多くは第8層において、葺石を考えられる礫とともに出土している。平安期の中で墳丘の崩壊が進行する段階があり、それに伴って周堀内に転落したものであろう。

また、微量ながら最下層を形成する第20層においても出土している。これらの資料は、周辺古墳からの流れ込みの可能性も考えられる。

第V章 結 語

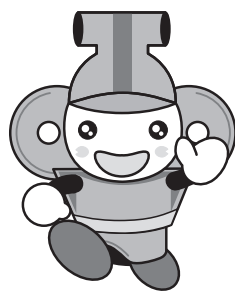
長沖古墳群は、他と離れて単独で存在する157号墳を除いても、総数202基を数え、埼玉県内最大規模の古墳群である。群内には、中期に築造された少数の円墳、5基の後期前方後円墳、1基の帆立貝形古墳を含むが、主体となるのは後期後半から終末期にかけて築造された小型円墳である。集成7～9期にかけての竪穴系埋葬施設を備える小型円墳はごく少数で、「古式群集墳」や「初期群集墳」としての性格は認められない。現状では、多数高密度に形成された「新式群集墳」または「後期群集墳」の内部に、中期円墳や後期前方後円墳が少数混在しているとする表現がふさわしい。

本書に報告した5基の古墳のうち、前方後円墳の第196号墳を除く4基の円墳も、すべて後・終末期の築造と推定される。なお、中期段階に比較的小規模な円墳の築造を見る古墳群には、塚本山古墳群や旭・小島古墳群、四十坂古墳群のように前期の小方墳を随伴する事例が認められるが、長沖古墳群の場合は、いまのところ前期小方墳を伴わないようである。これに対して、塚本山古墳群では前方後円墳が含まれないようであり、前期以来、造営期間が長い古墳群の形成過程は一樣ではないことが理解されるが、反面、後期後半における群集墳出現は汎列島の現象といえ、当該期において一段と強力な政治的契機が作用した結果といえる。

<文 献>

- 大熊季広ほか 2002 『長沖古墳群Ⅲ』 児玉町文化財調査報告書第36集 児玉町教育委員会
大熊季広ほか 2003 『長沖古墳群Ⅳ』 児玉町文化財調査報告書第37集 児玉町教育委員会
大熊季広ほか 2004 『長沖古墳群Ⅴ』 児玉町文化財調査報告書第38集 児玉町教育委員会
恋河内昭彦ほか 2006 『長沖古墳群Ⅵ』 本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 本庄市教育委員会
恋河内昭彦ほか 2008 『長沖古墳群Ⅷ』 本庄市遺跡調査会報告第21集 本庄市遺跡調査会
恋河内昭彦ほか 2011 『長沖古墳群Ⅸ』 本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集 本庄市教育委員会
恋河内昭彦ほか 2012 『長沖古墳群Ⅹ』 本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集 本庄市教育委員会
坂本和俊 2008 「北関東（埼玉・群馬・栃木）の大型円墳の築造動向」『前期・中期における大型円墳の位置と意味』
第13回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会
塩野 博 2004 『埼玉の古墳』 さきたま出版会
菅谷浩之 1980 『長沖古墳群』 児玉町文化財調査報告書第1集 児玉町教育委員会
菅谷浩之 1984 『北武蔵における古式古墳の成立』 児玉町史資料調査報告古代第1集 児玉町教育委員会ほか
鈴木徳雄ほか 2007 『長沖古墳群Ⅶ』 本庄市遺跡調査会報告第14集 本庄市遺跡調査会
鈴木徳雄ほか 2011 『長沖古墳群Ⅹ』 本庄市遺跡調査会報告第41集 本庄市遺跡調査会
南毛古墳文化研究会 2001 『本庄市域における古式古墳調査の成果と課題』 第5回群馬県古墳時代研究会・南毛古墳
文化研究会合同検討会資料
広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成畿内編』 山川出版社
日高 慎 1994 「IV詳細調査の概要2 遺物の概要」『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』 埼玉県教育委員会
和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』 第五巻近畿 I 角川書店

写真図版



本庄市マスコット

はにほん

図版 1



第194・195号墳遠景
[南から]



第194号墳調査風景 [東から]



第194号墳全景 [東から]

図版 2



第194号墳全景 [南東から]



第194号墳周溝
土層堆積状況 [南東から]



第194号墳周溝
土層堆積状況 [東から]

図版 3



第194号墳 [南東から]



第195号墳A地点全景 [西から]



第195号墳A地点全景 [南東から]

図版 4



第195号墳A地点周溝
土層堆積状況 [南から]



第195号墳B地点全景
[東から]



第195号墳B地点全景
[南から]



第195号墳B地点全景
[南東から]



第195号墳B地点
土層堆積状況 [西から]



第195号墳B地点
土層堆積状況 [東から]



第196号墳 SK-1
調査風景 [南西から]



第196号墳 SK-1 全景
[北から]



第196号墳 SK-1
円筒埴輪棺出土状況 [南西から]



第196号墳 SK-1
円筒埴輪棺出土状況
[南西から]



第196号墳 SK-1
円筒埴輪棺取り上げ後状況
[南西から]



第196号墳 SK-1
完掘状況 [南西から]



第196号墳 SK-1
円筒埴輪棺出土状況
[北西から]



第196号墳 SK-1
円筒埴輪棺取り上げ後状況
[北西から]



第196号墳 SK-1
完掘状況 [北西から]



第196号墳 SK-1
円筒埴輪棺合わせ口部
閉塞状況 [北東から]



第196号墳 SK-1
円筒埴輪棺基部
閉塞状況 [北西から]



第196号墳 SK-1
円筒埴輪棺円窓部
閉塞状況 [西から]

図版10



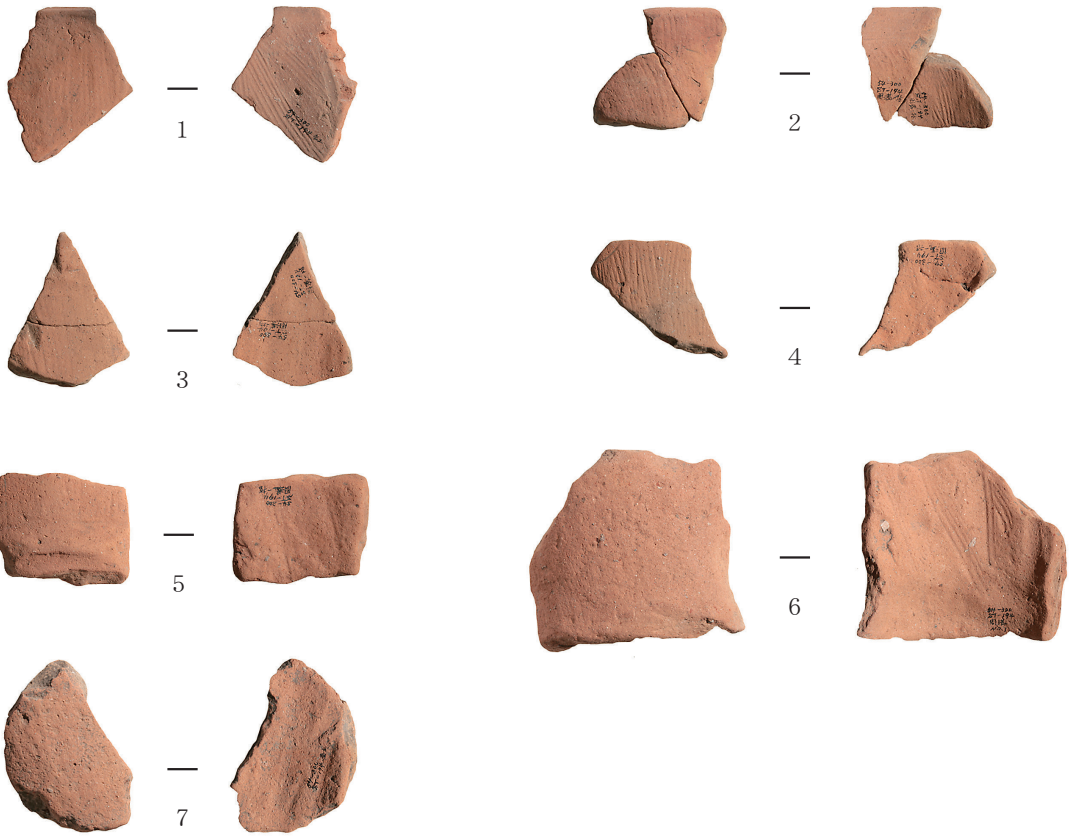
第201号墳全景 [西から]



第201号墳周溝
土層堆積状況 [南から]



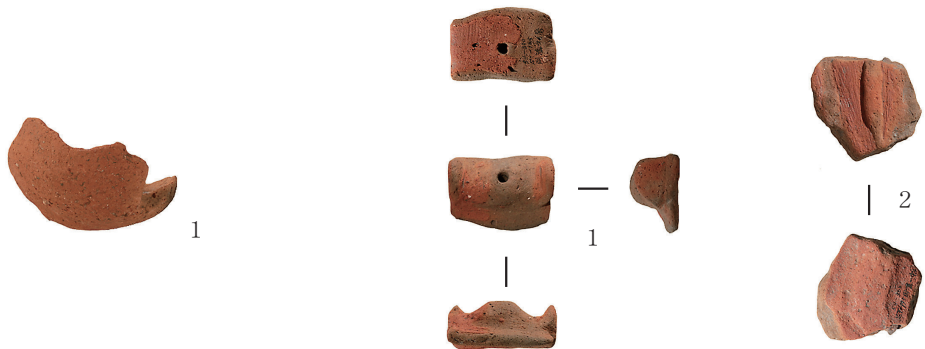
第201号墳周溝
土層堆積状況 [北西から]



第194号墳出土遺物 (1)

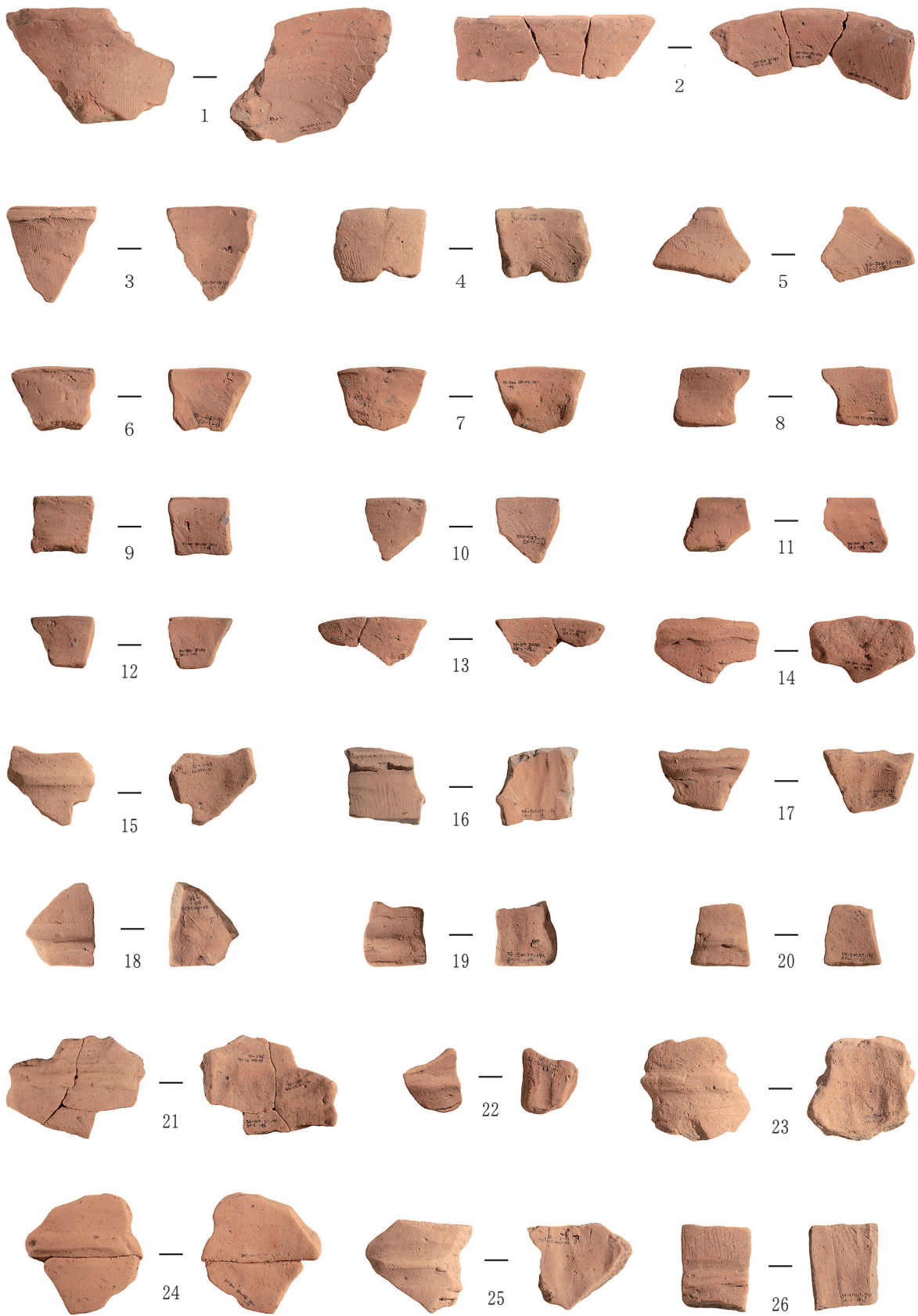


第194号墳出土遺物 (2)

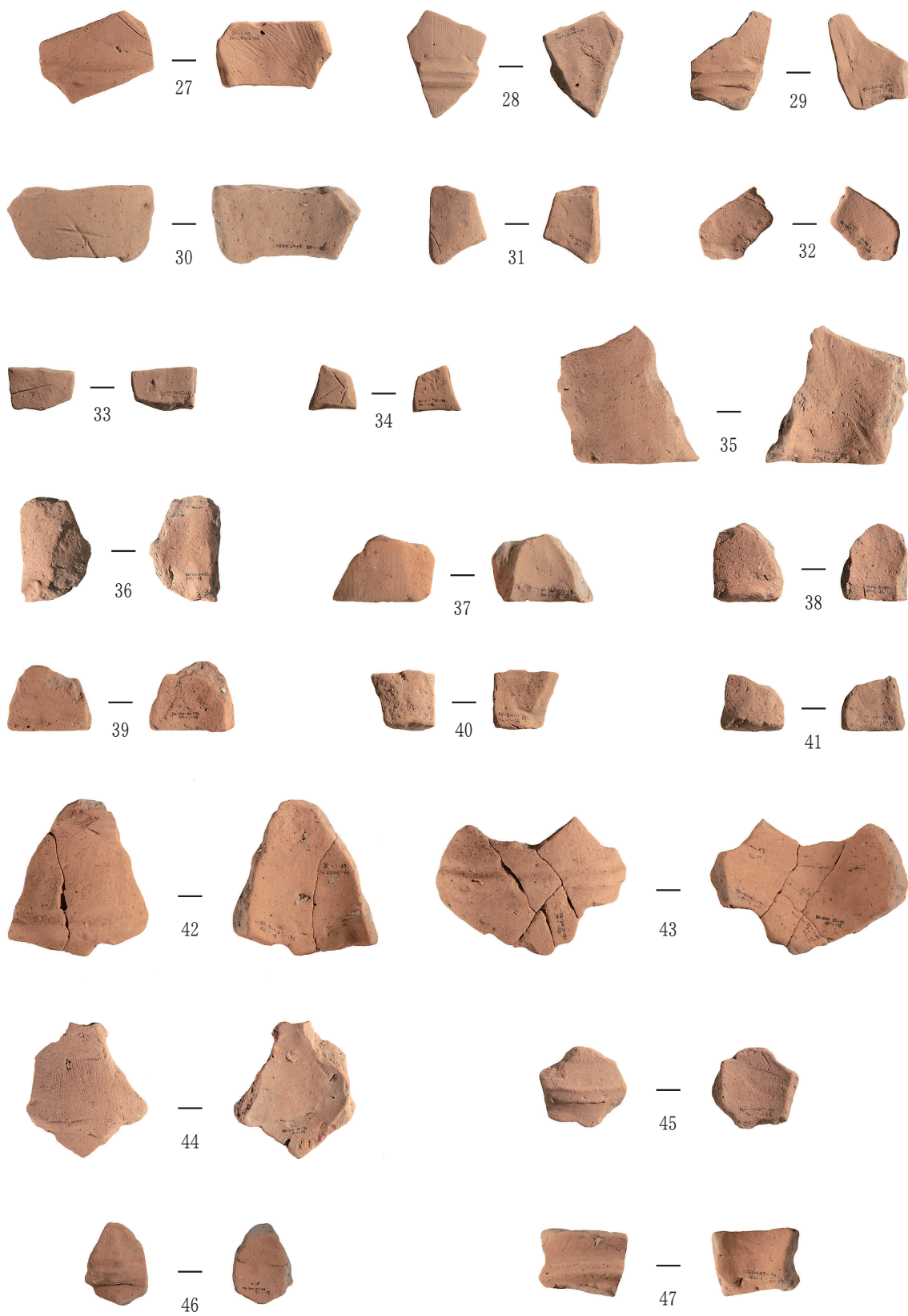


第195号墳出土遺物 (1)

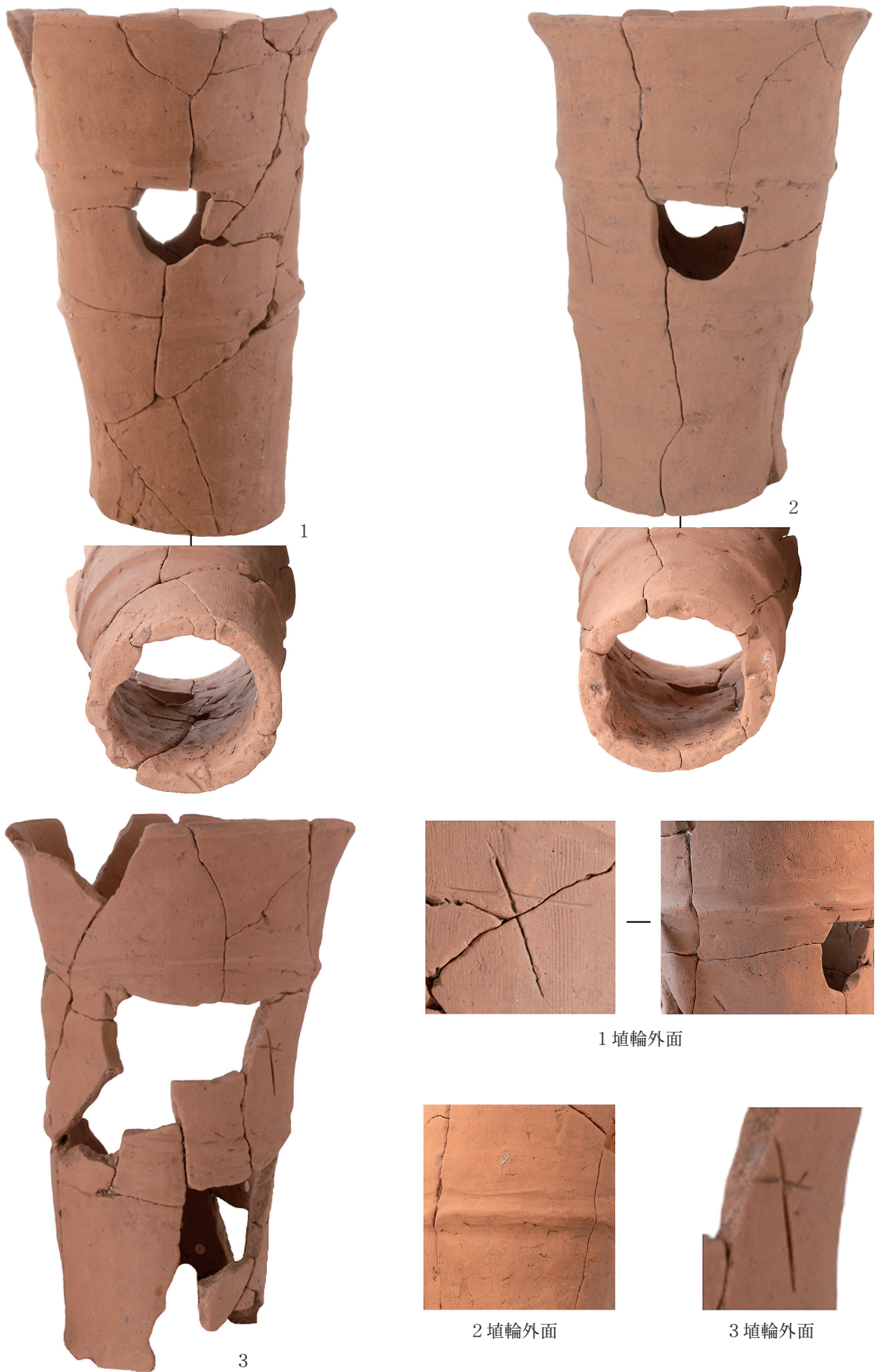
第195号墳出土遺物 (2)



第196号墳出土遺物（1）



第196号墳出土遺物（2）



第196号墳 SK - 1 出土遺物 (1)



—
3-1



—
3-2



—
3-3



—
3-4



—
3-5



—
3-6



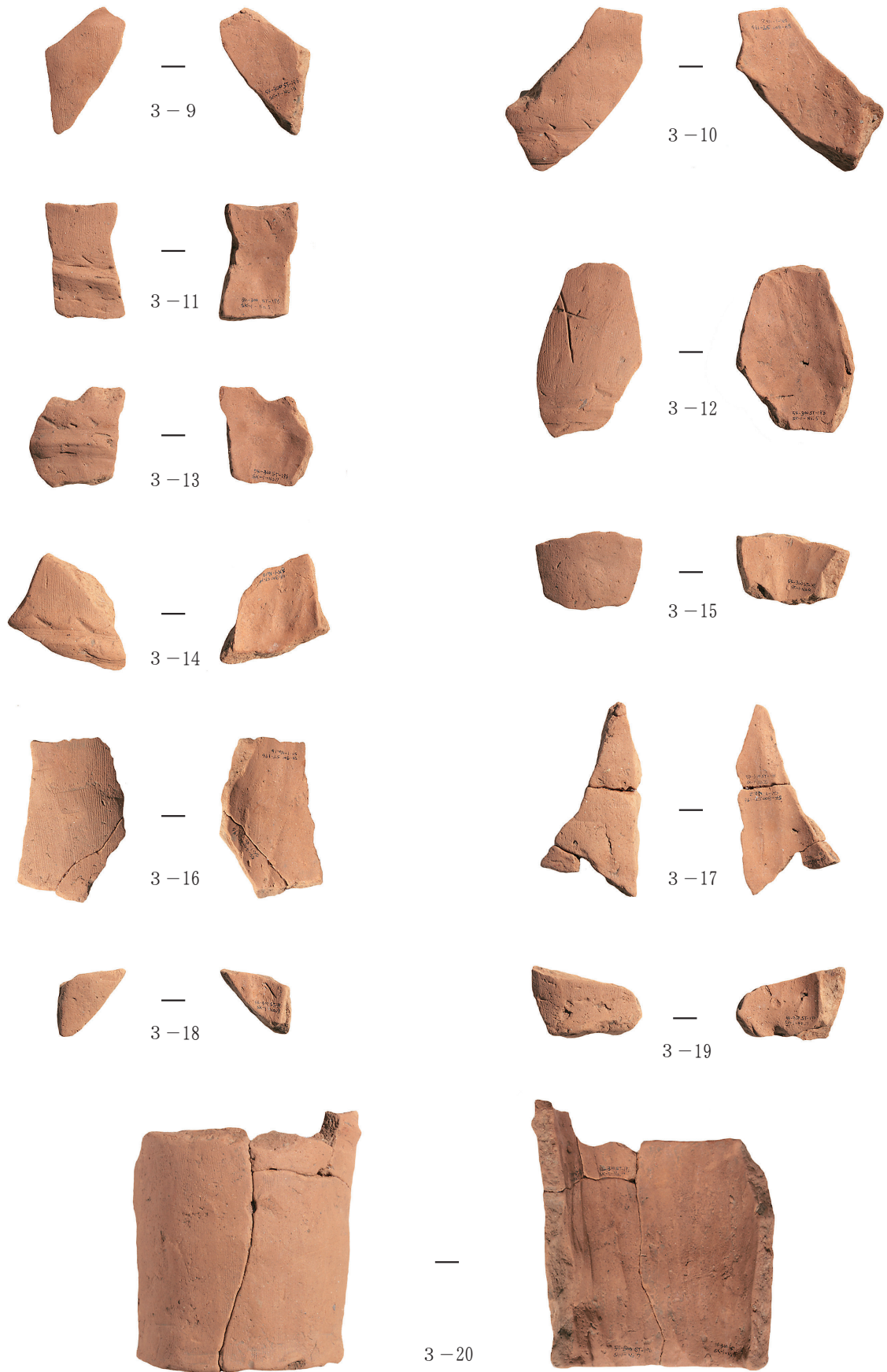
—
3-7



—
3-8



第196号墳 SK - 1 出土遺物 (2)



第196号墳 SK - 1 出土遺物 (3)

報 告 書 抄 録

フリガナ	ナガオキコフンゲン13							
書名	長沖古墳群Ⅷ —第194・195・196・197・201号墳の調査—							
副書名	児玉南土地区画整理事業発掘調査報告書 5							
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書					巻次	第39集	
編著者	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行日	西暦2014年(平成26年)3月31日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査 面積	調査 原因
ナガオキコフンゲン 長沖古墳群	ホンジョウシ コダマチョウコダマ 本庄市児玉町児玉 アサガケ ウエバン 字賀家ノ上520番1	112119	54-300	36°10'46"	139°08'10"	20090901 ～ 20110811	893m ²	区画 整理
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長沖古墳群	古墳群	古墳時代	古墳周溝6基		埴輪		円筒埴輪棺 1基検出	

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第39集

長 沖 古 墳 群 XIII

— 第194・195・196・197・201号墳の調査 —

児玉南土地区画整理事業発掘調査報告書 5

平成26年 3月28日 印刷

平成26年 3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

印刷／株式会社タカサキ印刷

埼玉県本庄市小島南1丁目10番27号